



婦人の子孫

第一卷  
第四號

# 婦人と子ども 第一卷 第四號 目次

獨逸皇室  
 巻首  
 庭  
 子母里そーだん  
 印度土人の家庭生活  
 おつちさんこれなに  
 此心  
 今昔いろは料理  
 いふことなきかゆ子ども  
 英語俚語解説  
 育兒學  
 傳  
 ヴキクトリア女皇  
 ローランド夫人  
 この情との涙  
 才女(樂譜附)  
 母のこころ  
 櫻ともみち  
 母と妹  
 春の山  
 和歌數首  
 林  
 女子に男子の所有なるか  
 究  
 臺灣の昔話  
 女子に就いての所感  
 盛岡地方の手繰歌お芋玉歌  
 駿河地方の子守歌につきて  
 小親の行

## 家庭

庭  
 子母里そーだん  
 印度土人の家庭生活  
 おつちさんこれなに  
 此心  
 今昔いろは料理  
 いふことなきかゆ子ども  
 英語俚語解説  
 育兒學  
 傳  
 ヴキクトリア女皇  
 ローランド夫人  
 この情との涙  
 才女(樂譜附)  
 母のこころ  
 櫻ともみち  
 母と妹  
 春の山  
 和歌數首  
 林  
 女子に男子の所有なるか  
 究  
 臺灣の昔話  
 女子に就いての所感  
 盛岡地方の手繰歌お芋玉歌  
 駿河地方の子守歌につきて  
 小親の行

## 文學

庭  
 子母里そーだん  
 印度土人の家庭生活  
 おつちさんこれなに  
 此心  
 今昔いろは料理  
 いふことなきかゆ子ども  
 英語俚語解説  
 育兒學  
 傳  
 ヴキクトリア女皇  
 ローランド夫人  
 この情との涙  
 才女(樂譜附)  
 母のこころ  
 櫻ともみち  
 母と妹  
 春の山  
 和歌數首  
 林  
 女子に男子の所有なるか  
 究  
 臺灣の昔話  
 女子に就いての所感  
 盛岡地方の手繰歌お芋玉歌  
 駿河地方の子守歌につきて  
 小親の行

## 研究

庭  
 子母里そーだん  
 印度土人の家庭生活  
 おつちさんこれなに  
 此心  
 今昔いろは料理  
 いふことなきかゆ子ども  
 英語俚語解説  
 育兒學  
 傳  
 ヴキクトリア女皇  
 ローランド夫人  
 この情との涙  
 才女(樂譜附)  
 母のこころ  
 櫻ともみち  
 母と妹  
 春の山  
 和歌數首  
 林  
 女子に男子の所有なるか  
 究  
 臺灣の昔話  
 女子に就いての所感  
 盛岡地方の手繰歌お芋玉歌  
 駿河地方の子守歌につきて  
 小親の行

花の時〇思ひ出るまい〇ストライキ節〇先頭病(順境の淑女と逆境の烈婦)〇趣味ある家庭〇我が敵を愛せよ〇筆法は無用〇筆のまに  
 英國幼稚園の状況  
 外十數件 會報  
 彙報  
 安井てつ

發行は毎月五日毎に發行第一號一月廿日發行  
 ●定價 郵税金六錢 郵稅金拾貳錢 郵稅金拾貳錢  
 ●臨時増刊は其程度定價を定めて別に申し受く ●切手代用は壹割増にて壹錢切手に限る  
 ●注文 是總て前金にて日本橋區本石町三丁目廿三番地金昌堂宛領收  
 ●送金は神田今川橋又は日本橋室町郵便取扱所受取人金昌堂宛の事見  
 ●本を要せらるゝときは郵便切手(但し一錢に限る)拾二枚を添へて申  
 ●越さる可し

●購讀者 宿所姓名は楷書にて御認め之事 ●轉居の節は新舊共に御通  
 ●し候間前金御送付を乞ふ ●御入用なき時は御断りを乞ふ  
 ●編輯 學校附屬幼稚園内フレノベル會宛のこと ●特別關書行四十錢 ●壹等二  
 ●廣告料 十錢 ●特別半頁十一圓 ●壹頁二十圓 ●壹等半頁五圓八十錢  
 ●壹頁十圓 ●二等半頁五圓 ●壹頁八圓

明治三十四年四月五日印刷  
 編輯者 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地  
 發行所 東京市京橋區木挽町九丁目三十二番地  
 印刷所 東京市京橋區樂田三丁目十五番地  
 女子高等師範學校附屬幼稚園内  
 帝國印刷株式會社  
 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地  
 金昌堂  
 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地  
 同東海信文合資會社  
 同北隆館

不許複製  
 發行所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地  
 印刷所 東京市京橋區樂田三丁目十五番地  
 女子高等師範學校附屬幼稚園内  
 帝國印刷株式會社  
 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地  
 金昌堂  
 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地  
 同東海信文合資會社  
 同北隆館

國語研究會編

新體 兒童の文例

四月中發行 製本優美  
定價金拾錢 郵税金貳錢

小學校に於ける諸學科の内、兒童の最困難するは國語科中の綴方なり。とは世人の齊しく唱ふる所なり、綴方教授實に困難なるに相違なきも教授法の研究未だ足らず方法宜しきを得ざる責もなしと謂ふべからず、本書は先きに小學國語綴方教授書を出して兒童の發達階段に留意し其の思想に適合せる教材を選び方法を採るべき模範を示し、大に世に歡迎せられたる國語研究會の編したるもの、文題悉く兒童的にして更に又兒童的思想と兒童的表出と綴り得て遺憾なきは是れ實に本書の特色なり、決して世にありふれたる「寸楮拜啓、御座候」的のものにあらず、されば尋常科三四學年、同補習科、高等科一二學年生徒の模範文とするに最適せり、且つ紙質製本共に頗る優美なれば當興品に適せり。

新體 兒童普通文例

新體 女兒のたまづさ

近刊

發行書肆

東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地

金 昌 堂



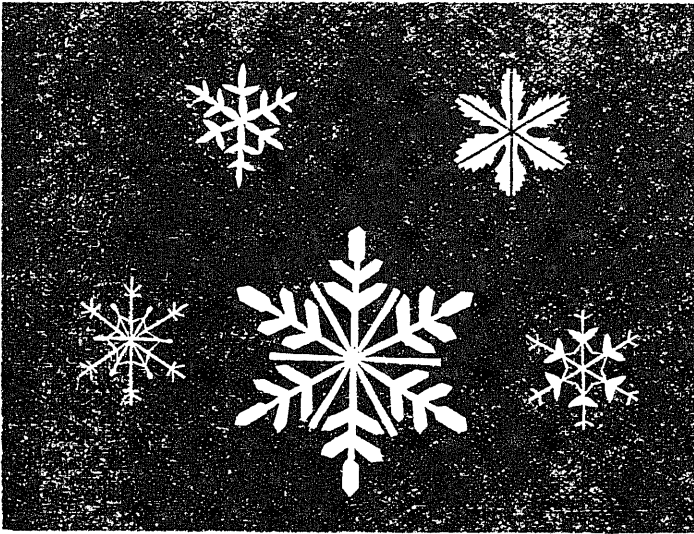
獨逸皇室



婦人と子ども

第一卷第四號

(明治三十四年四月五日)

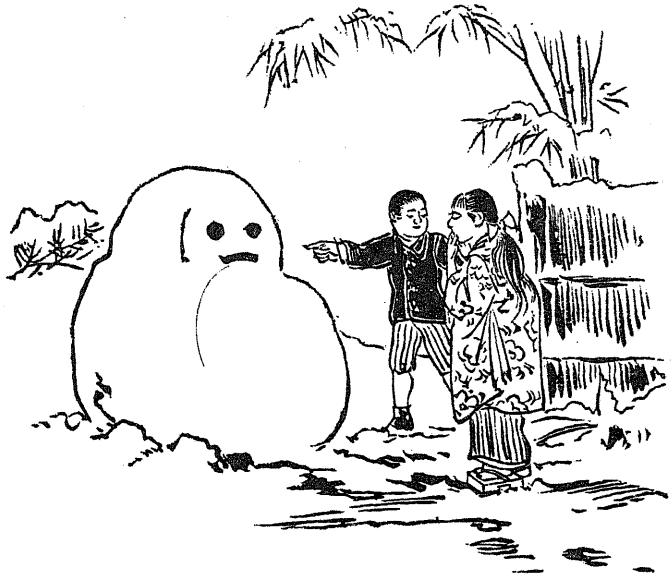


(てはは本  
す禁を載轉)

ゆき

これわ ゆきの え です。  
きれーでしよー ゆきわ て  
んから ふっ てきます。  
そのときに われらわ ゆ  
きだるま を こしらえて

とふれ  
ゆきよ  
おてらの  
ふれふれ  
まえに  
たん  
たんとふれ。



あそびます。

てんじんさま

「きみ あすわ にちよーだか  
ら えんそくしよーか」「いこー  
どこに」「てんじんさまえ うめ  
みに」「いこー」

「てんじんさまの なわ なん  
とゆーか して、おるか」「す  
がわらの みちざねさ」  
「なげ てんじんさまの きよ



「ないにわ　うめが  
あ  
るか　しってるか」

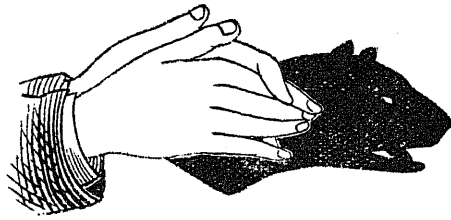


「てんじんさまわ　うめ  
あ  
が　すきで　あつたから





いまでも うえるのを「



ねことひと。

うえのがねこで  
したのがひとです。

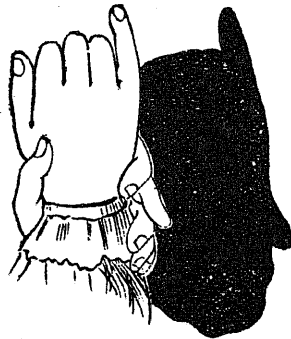


狼きつねと狐きつね後日ごじつものがたり。

みなさん

狼きつねわ

あんまり賢かしこい獣けだものでないことわ



この間のお話で 分りま  
したろー。で、もー一度  
狼がやりそこねたお話を  
して見ましょーか。  
ある時のことでした  
狼と狐とが また例の山  
の中で あって いろ  
く 世間話を して  
居ったのです。其時 狐  
わ狼に 「なんだって 世





のなかに人間ほどえら  
いものわあるまい吾々  
の仲間の者わだれだっ  
て人間にわ勝つこと  
ができぬ。だから僕わ  
いつでも計畧でやっ  
てゆくのだ」と話しま  
した。

ところか狼わ「僕わ  
まけないもし人間に

であつたら 一とびにとびついて見せる なしに  
 人間などに まけるもんか」と 威張りだした。す  
 ると 狐は「こりや 面白い 僕も助けてやるよ  
 てわ 今から 僕と一所に おいでなさい 人間を  
 見せてあげましよーから。  
 と ゆーので 二獣つれだつて 人の通る道ばた  
 え 出てきて 隠れて 見ていました所が そこえ  
 出てきたのが 年のいった 跛のおぢーさんです。  
 杖をついて跛ひきながら 山道を ひよこくとあ  
 るいてきました。



そこで 狼わ 「狐君 人間てのわ これかね」

「いや もとわ これも人間だったのさ」と 狐

が 返事した。

つぎに きたのが 學校がえりの 生徒です。皆  
さんと 同じぐらいの 年ごろで かばんを 肩に  
かけながら 沓をはいて すたくと やってしま  
した。

で 狼わ 「どーだ これが 人間だろー」と 尋  
ねました所が 狐わ 「どーして やっと 今からな  
ろーと ゆー所なのさ」

所<sup>ところ</sup>え　こんど出<sup>で</sup>てきたのわ　獵<sup>あ</sup>師<sup>し</sup>です。草<sup>くさ</sup>鞋<sup>せ</sup>脚<sup>あし</sup>胖<sup>はん</sup>

て身<sup>み</sup>を固<sup>かた</sup>め　腰<sup>こし</sup>にわ　斧<sup>き</sup>を横<sup>よこ</sup>たえ　二<sup>に</sup>連<sup>れん</sup>發<sup>ぱつ</sup>の獵<sup>あ</sup>銃<sup>じゆう</sup>を

肩<sup>かた</sup>にして　筋<sup>しん</sup>骨<sup>こつ</sup>逞<sup>たくま</sup>しき　大<sup>だい</sup>の男<sup>おとこ</sup>。獲<sup>え</sup>物<sup>ぶつ</sup>もがなと　あ

ちらちらを　睨<sup>にら</sup>みながら　山<sup>やま</sup>道<sup>みち</sup>を　上<sup>あ</sup>つてきた。

そこで　狐<sup>きつね</sup>わ　狼<sup>お</sup>に　そーつと　さゝやいた。「そ

ら　狼<sup>おしか</sup>君<sup>くん</sup>　これだく　これが　ほんとーの　人<sup>にん</sup>間<sup>げん</sup>

なのだから　すぐとびつきなさい。僕<sup>ぼく</sup>わ　ちよつと

自<sup>ひ</sup>分の<sup>ぶん</sup>穴<sup>あな</sup>のなかえ　かくれていましよーから」とゆ

ーので　狐<sup>きつね</sup>わ　さっそく　穴<sup>あな</sup>のなかえ　かくれまし

た。



狼おしまわ 人間にんげんだと きい  
て おそろしい目をむ  
きだし 牙きばをならして  
獵人かりうごに 飛びかゝった。  
獵人かりうごわ 「すわこそ 獲と  
者ものよ」と いきなり 二に  
連發銃れんぱつじゆう とりなをし 狼おしま  
の顔かほを ねらって ズド  
ンと一いっぱつ。キヤツと  
いって 倒たふれた所ところを あ

べこべにとびかゝつて 腰の 手斧をとるよりはやく狼の頭をつぎけうちに なぐりつけましたから たまりません。狼わ うんとも いわずに死にました。

このありさまを さつきから 狐は 穴の中えかくれて 見ていまして「あとうぐやられた僕 ゆーことを きかないで 一人で自慢するもんだから あんなめに あつたのだ」(おわり)



## 鳥をとる法

### やまとの翁

しかど、受合ふことは出来ないが、翁が、まだ幼なかつたころ、人から授かつた鳥取の法といふのと、一つ御傳習しませうか。

それは、つまり、暗こうなので。鳥といふものは、鳥のうちでも、よほどかしこくて、なかく、鐵砲などでとることが六かしい、それで、まづ方のつよい牛の尾の先へ二十ポンドばかりの鐵のダムベルを一、ひすびつけて、それから、その脊なかへ赤紙のきれを、少ばかり、張りつけて、そこで、この牛を野原へ、つれ出して草を喰はしておくのです。

すると、野原には、例の鳥が、幾匹となく飛んで居るですが、牛は、ヒつとして草を喰つて居ります。忽ち、一羽の鳥が、牛の脊なかの赤紙を見つける。所が、こ

れが鳥の目には、ちようど牛の肉が出ているかの様に見える、鳥は、例の通り肉なすが、大好物ですから、これは、甘い御馳走だといふので、すぐとんで来て、牛の脊なかへ、どまつて、無暗に、つゝきたすのです。そうなると、牛の方では、くすぐつたくて、仕方がありませんから、今まで、たれて居つた尾をふりあげて脊中を拂ふ、すると尾のさきには、例の二十ポンドの重さの鐵のダムベルが、くつゝいていますから堪らない。鳥は、これで以てなぐりおとされて、忽死んでころげおちて來ます。

こういふぐあいでは、鳥がなん羽でも、とれるといふのですが、翁も聞いた丈で、まだ實際ためして見たことはないんですから、始にもうした通り、しかど受け合ふことの出来ないのは、残念です。

そこで、もー一つ鳥どりの法を聞いていいますが、も

ちろん、これも取れそーにはないんですが、序ですか  
らお話だけしておきませう。それは、つまり、こうい  
ふんです。

まづ、夏の炎天に、濱邊へ、出まして丸裸になつて、  
半身を砂の中へ埋めて、仰ひけになつて兩手を頭の上  
に押しつけて單衣をひろげてつかんで居るのです。ごぞん  
じの通り鳥は人の死骸なぞが、大變に好物なんです  
からこれを見るや否や、死骸だと思つて、幾匹となく、  
眞黒になつて、飛び集つて來て身體をつゝさに來ま  
す、すこしは、いたい、くすぐつたいでせうけれど  
も、暫しんぼーして居つて、いゝ時分を見計らつて、  
兩手で以て、不意に頭の上から、單衣をかぶせかける、  
すると鳥は、もどく死體だと思つて油断しておつた  
のですから、堪らない。すくなくとも、五六羽は、伏  
せて取ることが出来るといふのですが、實際はさうで

すか。

考へもの

(一) さつね上下をぬいで、おどれば、ひじなも、上下を  
ぬぐ。(植物の名一つ)

さつね上下をぬぐと、つ、夫がおどると、つゝ、ひ  
じなが上下をぬぐと、じ。それで答は、つゝじ(躑

躑)

前號むちなどせるは活字の誤につき訂止す。

いろは謎の二三

(一) いの字どかけて

(二) ろの字どかけて

(三) はの字どかけて

なんどゝく。

## 人といふ字

### やまとの翁

なんでも、おほきな仕事をして、りつばな人にならうといふには、たがひに人と仲よくして、いつ所に仕事をしてゆく様にせねばならぬ。わがまゝをして、一人でかつてな事をやつて、ほかの人をいぢめたり、自分だけよければ、人は、さうでもかまはぬといふ様なことをしては、宜くない。そんなことは、けつしておほきな仕事も、できなければ、りつばな人にもなれない。人といふものは、どこまでも、互に、たすけ合はねばならぬ。そこで、人といふ字も、右と左と、もちつ、もたれつで出来て居るのである。だから、人はけつして偽な事を云つて人をだましたり、おどしいれたりなんかししては、いけないのである。ところが、こゝに又

## 偽といふ字

がある。これは、人といふ邊に、爲といふ字をつけて、即、人がなすと書いて、偽とよませる。言を換へていふと、人のすることは、皆うそだといふことになる、元來人は、互に、もちつ、もたれつで、出来ているのに、片々に、こゝにいふ文字があるといふのは、とんど、分らない話じやと、もうさんければならぬ。なんでも、これは、世のなかに、詐偽師どか、やましとかいふものがあつて、人をだましたり、おどしいれたりすることがあるから、それで、こんな字が、出来て居るのであらう。まかし、夫は、ほんといふ人ではないんだから、いつはりといふ字を、人が爲すどかくのは、甚おだやかでない。こゝにいふ文字は、これから字引からけして、ままひたいものでは、ござらぬか。

でなければ人といふ字とあはないことになる。

# 家庭



## 子母里そーだん

こにし のぶはち

父母として其子の生長や立身をとぞまぬ者はあるまい、又其子の長命や繁昌をよろこばぬ者もあるまい、其しよーこにわ赤子が生れて七夜になるまで、いやそれどころか、うまれぬ前のその前にんしんと定まる時より、夫婦そーだんして男兒ならば何、女兒ならば何と申しあわせ、念の入りたる所でわ祖父や祖母に名をえらんでもらい、自分の師匠にもたのむなせするもあつて實に子の行末を思い目出度縁起のよい名をえらぶ

わ有りがたき親の心なれば、決してわるいとわ申さぬが、如何に名わうつくしくても其子の生長の後の行がわるければ、うつくしき名わ反つてあざけりの種となり善太郎の名にも似つかぬ悪太郎、清まるどころか汚がれまるだなきとよく世の人のいうわ、其人の行の其名にかなわぬをそしりてのことなり、さればどて好んで聞にくき名や見にくき名を付けるにもおよばぬに悪太郎だの捨吉だのと付けたるもあるが、これわ如何に父母なればどて七夜ばかりの赤子の行末を見ぬきて付けたるわけでわなくて、夢わさかさまともいうとわざにつられて善太郎たれどの願より出でたるか、又わ病氣にてどても全快の見こみがないと醫者にも見捨てられしをせめてものことにと捨ててこそ浮かむ瀬もあれどまじないの心にて付けぬるもある一で、やはりその子の行末を案じわづらつて小しでもよかれといのる外わ



ないので決して其子の悪人たることを願つたり捨てるが本心の名でわれないが名のうつくしすぎるもよくないと同じく悪太郎の捨吉のというも其子生長の後多くの人と交る上に必ず幾分かの迷惑あると思われ、これも餘りはめられないされば子供に名を付けるに餘りこりかたまらず誰にもよみなやむことなくわかりやすいを第一とし次にわ自分でかくに手間のどれぬで書きやすいのが一ばんよろしいと思わる、人にわかりやすくて自分で書きやすいことばにわ目出度して縁起のよい名がないとわかざらぬ！

玄かるに婦人にして嬌肅だの秋月だのいう方があるかとおもえは博士中に初子といふ方もあるハツコであるかハツ子であるか御當人に伺わなくてわよみかたがわからぬでわ不都合でわないか、これがために郵便局で爲替金を渡すことをばんだ話もある、又いつぞや女

子高等師範學校卒業生姓名を印刷したものに卒業生の名に漢字でかいたもあり、萬葉假名もあれば平假名もあり片假名もあり實に見よくないので何故でときいてみると戸籍帳に載せてあるより外の書き方が出来ない故だときいてあきれて居る間もなく、わが友人が本郷から小石川に移つて来て轉居届に自分の妻君の名をいちと書いて出したれば區役所へ呼び出され、戸籍帳にいぢどあるからかき直して届けると申し渡され半日の公務をつぶし、われも亦出産届に家内の名をうめと書いて出し區役所へ呼出され戸籍帳にひめとあるからうをひとなおせと申され半日つぶれとなりしわ口やしくもあり馬鹿馬鹿しくもあり、人人にはなすとわれもなりわれもなりという人の多さを見れば世に戸籍帳のためにつさらぬ手間費して居る者何程あるか分らぬわなげかわしい事だ。

既に戸籍帳にのせられてむ容易に書き直すことの出  
 來ぬ規則であることを世の父母たちがよく承知である  
 か如何 田中正造と申す代議士と田中正藏と申す神田  
 の活版職と間違つてわならぬから藏と造と書き違せぬ  
 ようにとするわまだ少しわきこえるが、ちをいちと書  
 いてわるいのはつをどつと書んでわならぬの戸籍帳に  
 片假名でかいてあるからにわ平假名で書いたものを取  
 り上げられぬということでも實に究屈でわなにか、それ  
 も御上の規則で仕方がないとあきらめるならばせめて  
 わ此後此世に生れる多くの子供に此迷惑をかけぬよ  
 うに男兒には漢字を用ゆるにもせよ誰にも讀めて自分で  
 わ書きやすいというを第一とし女兒には先頭文部省で  
 定めて出された平假名で書くときめたいものでわな  
 かか？

むつかしい讀みにくい漢字で名を付けて其子の縁起

を祝ひ幸福を祈り賢人ぶらするのわ鬼の面をかぶつた  
 り銀紙を張つた木刀で子供や女をおどす盜賊が金箔と  
 からだ一面に塗りつけて自分を神さまぶろーとして體  
 内から悪るい氣の逃げ出る孔をふさいで死んだ馬鹿坊  
 主とおなじいよりの者だ！

印度土人の家庭生活 (承前)

Y. I.

若し信心深く、閑暇のある婦人ならば、庭園から數  
 枝の花を手折つて、最寄の神社に詣で、少しばかりの  
 菓子と賽錢とを、神様に獻げるのです。けれども、こ  
 れよりも、猶普通に行はれて居ることは、各の住宅  
 の庭内に、四角な臺を作つて其上に安置してある、羅  
 勤どか申して神聖なる植木の周圍を、この信心な婦人  
 達は低聲で、何事か唱へながら、グルグル廻つて満足

して居ます、夫で時によると、百八度廻りの願をかける婦人も、ありますすが、最も敬神の念が深くつて閑暇のある婦人どきますと、数千度も廻るのですが、これは非常に熱心な印なので、寡婦か、さもなれば、何か特別な誓願のある婦人で家事に餘かゝはりのない者の外には、こんな事をなすことは稀です。

家族で使ふ丈十分の水を汲でから、家の掃除をなし終りますと、晝餐を用意する時間となり、これは主婦が直接に、監督しなければならぬ、大切な務でございますして、大概は主婦自ら食物のある部分を調理いたします、食物の重なるものは、種々の穀物の粉を、いろく調理したものでありまして、御飯やカレーや野菜や牛乳など、又特別の場合に限用ふる砂糖漬のやうなものは、其一部分で、ございます。

この料理を始める前に、臺所の床を洗ひ諸々の器具

を磨くことは、申すまでもないことですが、驚くべきことは、これに係る婦人たちは皆入浴して絹布を着更てから、はじめて此料理にとりかゝります。印度人はこの點に付ては非常に嚴重ですから調理する際、もし齋戒沐浴しない人に、觸るやうな事があるらうものなら、大變なのです、忽ち潰されてしまふのですから、再び入浴して更に新たに絹布をきかへなくては、その料理した晝餐は、全く不潔なものとなつて仕舞つて、家族の人々に供するのに適しないものと、なつてしまふのです。

そこで食事の時が、近づきますと、男子も庭内に入浴いたしましたして、各食事の時にのみ用ふる特別の絹布を、さますのですが、これわ腰から下に巾の廣い切を、纏ふのみで、上半身は裸體のままなのでございます。

さて食堂では、小兒も一所に、つらなりませうのです

が、婦人達は晝餐を食堂に運まして、先づ少量を神様にさしげまして後男子と小兒どに供へます。青葉を皿に用ふる風習が、ありませんが、スプーンやフォークは、供へる時にのみ、用ひるので、各自は皆指で食べます。酒類は一切宗教の禁する處となつて居ります。故に水の外は何も飲料に用ゐませぬ。

妻たるものは其良人に待りて、給事する特權を有するので、若し年のわかき妻が、その良人に給事することを、禁せらるゝことがあらば、それは甚しき譴責を、意味するので、之より大なる罰はないのでございませぬ。

男子の食事が、すんでから後で、婦人たちは、席について、食事をしますが、この様に、一家内の男子に給事して、それから、あとで自分が給事する様なことは、印度の婦人たちでこそ、少しも、苦勞とはお

もはずに、出来るのですが、これかもし英國の婦人であつたならば、とても辛抱の出来ることでは、ありません。

つまり印度人のためには、食事することは全く、宗教的なので、男女ともに、食前には入浴更衣しなければ、ならぬ位ですから、婦人達は食物を調理すること、苦勞としないばかりでなく、反つて、この務をなすことを、光榮と思ひ、周到なる配慮をもつて、親愛なる家族の男子と小兒どに、食物を供し満足させて、食堂を去らしむるのでございませぬ。

この大切な務を、えてしまいますと。婦人達は、暫時休憩いたします。

で、印度では、妻たるものは、その良人の食べのしを、食べ終る特權を持つので、ありますが、この事は時々印度人の人情風俗をよく知らない人々は、耻辱

のやうに、云ひふらし、ますけれども、印度の婦人は、反つて、之を光榮といたします。なせと、申しますのに、婦人達は、これを最も親密なものにのみ、許されたる特權と見做して居るからでございませう。

夫から又、印度では、階級によつて、人々を離隔することが、甚しう、ございませうから、丁度英國などで他人の用ひた齒刷牙を、つかふものは、ないやうに、印度人は、他人の飲食せし器具を決してつかひませぬ、唯妻たるもののみ、階級の習慣によつて、良人と同じ食器を、用ひることを許されて居ます。

印度人の重なる食事は一日にたい二回即ち晝餐と晩餐とで、あります。後者は前者のたゞ小なるものなのです。

婦人達は晝餐後、臺所と諸々の器具を洗ひさよめて、それから、衣服をさかへまして、一時頃より、四時か

五時頃まで、暫らくは、閑暇になるのですが、この二三時間を、どういふ風に、過すかは、主婦たる人の意志と嗜好とに大なる關係があります。保守的家族では、主婦は年若婦人に、讀み書きすることを、許しませぬ、これは多分婦女を教育すると、主婦の威嚴を軽く、しはしないかといふ恐があるからでせう、ですから大抵、印度の女子は普通の意義で無教育であります。

そこで主婦は、その監督の下にある婦女達を、よく管理するに足る、教訓者でなくては、ならないので、あります。然し主婦たる人が、親切な人ならば、此二三時間の、すこし方に付ても、よほど寛裕にして居ます。

いかにせむ部の春もおしけれど

なれしあづまの花やちるらん

阿母さん、これ何

ひ さ 子

阿母さんこれ何。阿父さんは、どこへいらしたの。

あれはどうしてできたの。それはどこから持ってきたの。なま、いふことばは、よく子供が申します。實に子供は、何でもきいたがり知りたがるものでございませす。此間も、私が湯屋にまゐりましたところが、一人の阿母さんが、六歳位の男の子をつれて、はいつてまゐりました。その子が阿母さんにたずねますには。

阿母さん、この御湯はしまひにどうするの。

阿母さんはまじめに、

これはチー、しまひに番頭さんがのんでしまふのですよ。

と答へました。大人ならば、どうしてのめるものか。

と思ひますが、かわいそうに子供ですから、そうかし

らんどいふやうなかはで、さもふしぎさうにきいて居りました。

今度は、その阿母さんが、そばに居る人に向て、

あなたチー、此子はどうも、いつでもつづらないことばかりきいてしかたがございませせん。先日も、あたしはどうしてできたの。御醫者様がこしらへたの。とたづねるのでございませすよ。

はなしかけられた人は、

そうでいらつしやいますか。私方の子ども、御同様でござります。先日も、阿母さん、雲はしまいにどうなるの。と申すのでございませすよ。

私は、この二人の阿母さんの話をきゝまして、あの阿母さんたちは、折角子供の出したよい間をば、しかたがないとか、こまるとか言つて、うるさがつて居られる。子供の方から考へると、随分かわいそうな

はなしである。と感かんじました。

なせならば、はじめにも申もうした通り、いろんなことを問とひたすのは、子供こどもの天性てんせいです。そうして。問とひだして答こたへてもらふたびに、何かしら知りませう。大人おとなでも、知らないことを人に問とうて、その人が親切しんせつにこたへてくれましたならば、それで何かおぼえるではありませんか。ほんとうに、物事ものごとを問とふといふことは、物事ものごとを知る源もとになるものでございませう。何なにを見聞みきしても、なにであるか、なせであるか。といふやうな疑うたがひを起おこさぬ人はどかく進すすまないものでございませう。ですから子供こどもには、ものを問とふ習慣くせいを、求もとめてもつけてやりたいのです。ところが都合つごうよく、子供こどもは、よく何かを問とひたすやうにうまれついてをります。

ですから、子供こどもが何かたづねましたならば、大人おとなは、よろこんで答こたへてやらなければなりません。決して、

家庭 阿母さんこれ何 此心

うるさいとか、やかましいとか言いつて、子供こどもの心こころをくじいてはなりません。できるだけ、子供こども相應たうりやうに、よく分わかるやうに、答こたへてやることが肝心かんじんでございませう。もしました、はなしでもとても分わからぬことならば、今はまだはなしをあげても分わからぬ。大きくなつたら分わかる。と言いひきかせば、それがよい答こたでございませう。ほんとうに似にたやうなうそで、ごまかした答こたをするのは、まことにいけません。

梓弓すしきうはるの山やまへを越こえくれば

道みちもさりあへず花はなぞちりける

此この心こころ

漆うるし 生なま

入いり相告あひつぐる山寺やまでらの鐘かねの響ひびきは、鎮守ちんじゆの森もりにゆらぎ渡わたりて、時ときに急いそぐ暮鴉くれからすは早はやや巢すこもりたらむ頃ころ、終日ひねり働はたらき

たりし田圃より出で、妻なるは迎かへに來りし年頃十

四五の娘の脊より三つばかりなる幼児を抱き下して、

之に乳のませながら、二人の鍬を束ねて肩にせる夫に

従ひて、子守半天を抱えたる娘を伴ひて、歸り行く路

の側の家屋の、瓦の屋根の軒の間に營める雀の巢の中

に「ジュウ〜」と幼き雛の聲するに、今まで母の乳

房にすがりて餘念なかりし幼児の、忽ち耳そばだて、

母なるに、

あれは誰の聲よ

と尋ねられしに

雀の子の鳴くのよ

と可愛げにさぞせば、幼児も亦心地よげに

雀の子はお母さんに抱かれて乳よ〜といふのであ

らふ

なぞ語りつきて、更に雀の聲の聞えずなりしに心付き

て

あゝ、もう止まつた、寐ねした、雀のお母さんも

小さいも寒からふ、風の吹くのに蒲團もなしに

とされ〜に語るあどけなきふし〜、後れ行く余の

耳には強く止まりぬ、名聞には縁遠き片山里の農夫

々々と呼ばれても、その家庭の暖さの一斑、此兒の詞

にても推しはかられて、よその見る目にもゆかしくも

またたのもしかりき。

市中を、どりわけて夕暮に、往き交ふ人は見もし聞

きもしするならむ、鶏肉屋の店頭にて、怪しげなる籠

の中より鶏の、羽ももげよとつかみ出されて、凄まじ

き叫も瞬く間に押しつぶされて、謂ふに忍びざる有様

となり果つるを、やさしき人は眼をむけ耳ふさぎて行

き過ぐるならむ、或日余は見るとはなしに、凄絶き叫

に心ひかれて、驚けり、屠夫の差し出せる手にぶら下



りて身をもがく鶏の側に、一人の子守娘の立てるに、更に驚けり、其子守の脊より女兒の四歳ばかりなるが楓の如き手さしのばして、なぐさみに、半ば氣絶せる半ば裸にせられたる鶏の尾羽を引張り居れる其光景に。不快を感ずる人達も慣れば慣る、淺猿さに恐しや無心の此幼兒の行末の。

職業に貴賤なし、とはいふもの、幼兒の爲には家庭の人々の心懸こそ、と余は彼此限りなき感想の止めかねしものありき。

文は後に櫻さしだす使かな

今 いろいろは料理

石井泰次郎寄稿

(ろ) 六角玉子の拵へやう

玉子の宜敷を撰みて、鍋に水を張りて玉子をいれて

家庭 此心 いろいろは料理

初より箸にてかきまはしながら煮ぬくべし。煮抜ときかく動かし居る時は、黄味は片よらずして、真中にあるなり。又煮抜たる玉子の出来上りを見わくる方法は、金杓子か網杓子にてすくひて、湯より鍋の外に取上て見れば、直ちに皮の水氣の乾くが湯煮の出来上りたるにて。乾くことの、直でない時は、未だ出来ぬものなりと、是が見別かたなり。かくて上のからをとり扱からを取たる玉子を、布巾にてつゝみて、六方より、板の細きものをあて、堅くしめて六角をなすべし。

又玉子を煮抜て殻を去りて、白味の中より庖丁にて、切めぐらして二ツになし、中の黄味を出して、黄味と白味と別々にして、先白味の方へ、先砂糖の上品をませて、鹽少しを入れて、馬尾篩にて、裏漉とて、馬尾篩の裏にのせて、木杓子にて押して漉すべし、次に黄味の方も砂糖の同じ品をませて馬尾篩にて裏漉をして、

扱、白き巾布の上に美濃紙を<sup>ひの</sup>しきて、白味のこしたるを伸しおき、黄味を其中央に長くして入れて白味にて包<sup>つ</sup>ひ仕方になし、美濃紙は包みながらぬきて上<sup>う</sup>にのみまくやうにして、其上を布巾にて包みて、六方より細き板をあて、糸にてしかどまきしめて、蒸籠に入<sup>い</sup>れてむすべし。

ひしたるを取上て、布巾をとき紙を去て木口より切てつかふべし、六角に、て真中に黄味丸く見えたり。名稱は龜甲玉子といふべし、前の拵方はてがるにして味はすくなし、後の仕方はておもなれど、味は多くしてうまし。

いふことをきかぬ子供

林 ふ み

私は、昨年<sup>まくねん</sup>の春新<sup>はるあたら</sup>に幼稚園<sup>ようちえん</sup>に入<sup>はい</sup>りました子供<sup>こども</sup>、三

十人<sup>じゅうにん</sup>を世話<sup>せわ</sup>して居<sup>ゐ</sup>ります、此の子供<sup>こども</sup>達は色々<sup>いろく</sup>でございまして、中には實<sup>じつ</sup>に子供<sup>こども</sup>らしい無邪氣<sup>むじゃぎ</sup>なのもありました、小供<sup>こども</sup>には不似合<sup>ふにあひ</sup>な程<sup>ほど</sup>おどなびたのもありました、また、花<sup>はな</sup>のやうでも申しませうか何時<sup>いつ</sup>も、にこ〜と、うれしやうな顔<sup>かほ</sup>をして飛<sup>と</sup>びはねて居<sup>ゐ</sup>るのもありました。また、じつとして何<sup>なに</sup>となく沈<sup>しづん</sup>で居<sup>ゐ</sup>るのもありました。まだ少しも泣<sup>な</sup>かない子供<sup>こども</sup>があるかと思<sup>おも</sup>へば随分<sup>ずぶん</sup>よく泣<sup>な</sup>く子<sup>こ</sup>もありました。また、すなはで、おどなしのものあり、いふことを聞<sup>き</sup>かぬのもありました。

斯<sup>か</sup>様に色々<sup>いろく</sup>ございしますが、來<sup>き</sup>た初<sup>はじめて</sup>に、格別<sup>かくべつ</sup>にいふことを聞<sup>き</sup>かぬ女兒<sup>むすめ</sup>が一人<sup>ひとり</sup>ございました。其<sup>その</sup>の時<sup>とき</sup>分<sup>ぶん</sup>其<sup>その</sup>の子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>は呼<sup>よ</sup>ばれても返<sup>へん</sup>辭<sup>じ</sup>をいたしません。朝<sup>あさ</sup>まゐつてお辭<sup>じ</sup>儀<sup>ぎ</sup>もいたしません。積木<sup>つみき</sup>をあげますから、いらつしやいと言<sup>い</sup>ふてもまゐりません。六球<sup>ろくきゅう</sup>なぞわけ與<sup>あた</sup>へますと直<sup>ちか</sup>にはり出<sup>だ</sup>してなげつけます。鼻<sup>はな</sup>汁<sup>じ</sup>が<sup>で</sup>出<sup>で</sup>て居<sup>ゐ</sup>るから、と

つてあげませうと言ふても、いやといつて頭を振りま  
す。一度泣き出しますと何にしても、かたなくつて動  
きません。申すまでもなく他の子供と一緒に遊ぶこと  
もなければ、同じ腰掛に腰もかけません。實に何處か  
ら手を出して、どんなに取扱つてよいやら、一向分り  
ませんでした。

まかしまづ次のやうに取扱つてためして見ました。

第一は十分にこの子供を愛するまでござひます。こ

れは、どんな人を教育するのにても必要でございま

せうが特に幼児を教育するには大切でござひます。

また別して悪い子供を取扱ふのに大切でござひま

す。若しも其惡をにくむのでなくて少しでも其子供

を厭ふ様な心があつたならば、これは、もはや子供

をよくすることの出来ぬ徴と思つて間違はありませ

ん。決して、にくいと思つて育てる子供のよくなる

ことはありますまい。是に引きかへて十分子供を愛  
しましたならば、だん／＼と子供はなついてまわり  
まして、知らず／＼の間によい方に向ひます。眞に  
この子供は愛しましたので、だん／＼すなはでわた  
／＼かになりました。

第二は言ひつけることは極々少くにして、一度言ひ  
つけたことはどんなにしても行はせることとござひ  
ます。前に申した様な子供でござひますから、あれ

これと申せば申すだけ無益でござひます。また、

言はれて、せぬことが度重なる丈子供に言ふことを聞

かね弊が付きますから、不爲であります。そこでま

づ幼稚園にまわりました時と、歸ります時とにお辭

儀をするといふ只一つの事をさせやうと思ひまして

他の事はするまゝにほつて置て、これ丈に骨折りま

した。所が只一つのお辭儀でござひますがなかく

いたしません。遂には仕方がありませんから、頭を押へてやつとさせます。斯様にして、やうやく一月餘り後に自分からすることが出来るやうになりました。此時の私のうれしさは何とも申されませんでした。次にさせましたのは返辭をすることでございす。これもお辭儀と同じで初めは随分つかしうございしましたが間もなく出来ました。斯様にしてさせることの數をましました。

第三は言ふことを聞かぬと自然に面白くない結果のあるものであることを知らせることでございす。か様な子供に特更に苦みを與へることはよくありません。却て、益言ふことを聞かぬやうになります

から、言ふことを聞かぬと自然にわるい結果のあることを知らせるのがよろしうございす。そこで積木をあげませうと言ふても來なければはつて置きま

す、そうすると他の子供達が家とか、汽車とか、畑出とか言つて面白そうに積て居るのを、だまつて見て居なければなりません。また、食事のとき室に行きませうと言ふても、聞かなければ、其儘庭に置きます。そうすると腹が空きますから自分でのごくど入て來る様になりました。

第四は此方が極めて、すなはにわたること、ございす。此方では非させやうと思つて居ることは別でございす。其他の事で例へば「先生草とつて頂戴」など言ふことがありませすれば快くどつてやりませう。「あちらに行つて遊びませう」といへば直ぐに一緒に行ませう。「ばつたをとりませう」といへば喜んで共にどります。

斯様にして世話して居りましたが、次第によくなりました。只今では全たく普通の子となつて、他の子供

達と樂しそくに遊んで居ります。これは前申しました  
四箇條の取扱方が、めがあつたとおもはれますが、  
特に第一と第四の條件が大切であつた様に考へられま  
す。

そうして見ますと、この女の兒がいふことを聞か  
なくなつたものは色々ありませうが、重に次のやうなこ  
とでございませう

一、子供に與へる命令が、時によつて色々とかはつ  
て、始終一貫しないこと。

一、子供不相應に命令の數が多いこと。

一、子供を愛することの足ぬこと。

一、子供が言ふことをきかぬ時に不自然に強情な仕  
方で無理にさせやうとすること。

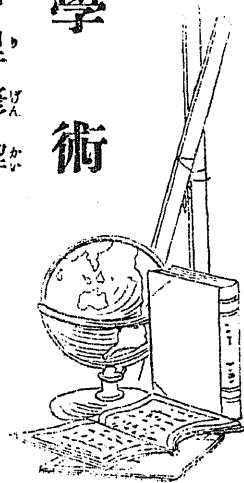
言ふことを聞かぬ幼兒にも色々ございませうが、右  
は只一人の子供についての觀察と經驗でございませう。

あつちへし天氣なりけり花ぐもり

## 學術

英語俚諺解

擊水生



はしがき

俚諺といふものは、大變な眞理を、ごく卑近に述べ  
て、誰にでも分りやすくしてゐるもので、至極面白い  
ものである。さこの國にでも、これはあるものであ  
るが、國が違ひ、風俗が異なるに従つて、自ら、違  
つた俚諺が出来て居るのであるから、ある國の俚諺

を調べる時、自然に其國の風習や人情を察することが出来る。

で、近來、本誌に向つて、いろいろ注文がある中で、英語のはなしを入れてほしいもんだといふのもあつた、それも宜しいが、英語の様なものには、とても、雑誌や何かで、知ることが出来ない。書いたもので、出来るとすれば、その様な書物は、他に澤山あるから、夫よりも一層あの國の諺でも、のせたら、一方では、英語の知識をも得、また一方では、彼國の人情風俗も知れて、つまり一舉兩得だと思つたから、それで本誌からつらけて載せることにしたわけである。

(二) On Home.

(一) 家庭に關するもの。

East or West, home is best.

東するも、西するも、家庭は必ずしも所はなし。

Men make houses, but Women make homes.

家を造るは、男子なり、家庭を造るは婦人なり。

There's no place like home.

家庭は必ずしも所は、よこにのみならず。

He is happiest, be he king or peasant, who finds peace in his home.

帝王たるも、農夫たるもを問はず、家庭の和樂せるものは、最幸福なり。

Immunity, extravagance, contempt, wrath, strife, envy, opposition—These be the seven devils possessing the unholy hearth.

怨恨、奢侈、輕慢、憤怒、爭鬭、嫉妬、反對は、家庭を不聖ならしむる七惡魔なり。

Water, smoke, and a vicious woman, drive men out of the house.

水火と悪性の女とは、男子を戸外に放逐す。

No man can safely go abroad who does not

love to stay at home.

家庭に居て、楽しむことの出来る者は安全にこの世

を渡ることを得ず。

The place to spend a happy day Home.

幸福に、口を毒すほどの場所、即家庭。

A virtuous woman though ugly, is the ornament

of the house.

容貌は醜しむも、徳高き婦人は、家の裝飾なり。

A virtuous woman is a crown to her husband

but she that doeth shamefully is as rotteness

to the bones.

徳高き婦人は、夫の爲には、王冠なり、非行をなす婦

人は、骸骨に附着せる腐肉の如し。

She that does not make her family comfortable

will herself never be happy at home and she who is

not happy at home will never be happy anywhere.

家族をして愉快ならしめざる婦人は、家庭にありて、

自幸福なる能はず、家庭に在りて幸福なる能はざる婦

人な、行く所として、幸福なる能はざるなり。

A good husband makes a good wife,

善良の夫は、善良の妻を造る。

A world of comfort lies in that one word wife.

安慰の世界は、妻と云ふ一言の中に横たはる。

Choose your wife by your ear than your eye.

目よりも耳によりて、汝の妻を擇む。

Obedient wife commands her husband.

従順なる妻は、夫の命令者なり。

He who do not honour his wife, dishonours

himself.

己の妻を賞賛せしめる者は、自を辱しむるものなり。

Home love is a woman's very life; a man may

live without it.

家庭的愛は、婦人の眞の生命なり、男子は、これなく

て生活し得ずらむ。

He who has a bad wife can expect no hap-

piness that can be so called.

惡しむ妻を持つ男は、いはゆる幸福なるものを期望す

らむたがた。

It is a sorry house in which the cook is silent

and the hen grows.

牡鶏黙して、牝鶏の鳴く家は、悲しむべき家なり。

Neither reproach, nor flatter thy wife where

any one heareth or seeth it.

他人の見聞する所にては、決して、汝の妻を非難し、

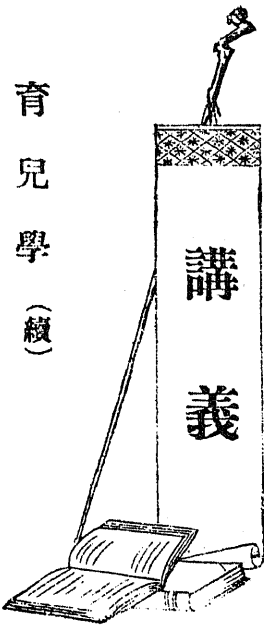
又は、彼女に阿諛するなかれ。

Withdoin in the man patience in the wife

bring peace to the house, and a happy life.

夫に智あり、妻に忍耐あれば、家庭に平和と幸福の生

活どが来るべし。



育兒學 (續)

中村 五六

●乳齒の生へたる後の注意、初て乳齒の生へ

出づるのは、健康なる幼児に於ては、生後凡そ六七個

月でありませすれども、孱弱なる幼児に在りては、十四



個月經ても、猶ほ生へぬものがあります。併し、斯く齒の生へ方後るゝは、あながら身體の弱きの方に限らず遺傳によることもありす。既に此の期に至りませば、母親により乳が十分ありましても、豫て斷乳の用意として、一日に一度か又は二度か試として、母乳の外の食物、即ち人工食物を交せ用ふるを、本來の規則といたします。人工食物には、牛乳を普通にして最も宜しとし、又かたくり、麥などの粉類を軟熟となしたるもの、或は肉類の羹汁を製り、之に適宜の粉類、砂糖、食鹽をませ合せ、よろゝに養こなしたるものなぞを用ひます。

斯く乳齒の出初めたるは、體內の胃なぞもだんく他の食物に堪ふべき有様になりたる印ともなりませれば、人工食物を與へ始むるは、全く此等の自然の徴候によるべきことにて、唯、月日の數のみにて、決して

定むべきものではありません。故に右に挙げし如き人工食物を交せ用ふるは、つまり種々の食物を用ふるべきの準備でありますれば、其の撰擇、調理、分量、用法等に、よく注意せねばなりません。

人工食物を用ひ始めたるときは、よく幼児の有様に氣を付け、何等の病もなく、生育もよきときは、漸次に、之を與ふる度數を増し、母の乳を與ふる分量は之に應じて減じ行きて、月日の移る間に、漸く斷乳の運を回らしますれば、其の期に至りて、聊も、斷乳に困難はありませぬ。且つ又、かくのごとく、漸次に乳を離れまするときは、母も兒も、身體の爲に露はどの害あることもありません。然るに、此等の注意を怠るためか、乳離れ兒とて、わはれ身體の衰弱せる兒ども、世には尠からぬやうに思ひます。

●斷乳の時期、幼兒の斷乳の時期は、母の健康及

事情ど、兒の發育及健康との二様の状態に従ひて、自ら遅速の別がありませすれば、月日を限りて、其の期を定むべきではありませぬ。

母の身體健康にして、乳も澤山あり、兒も又發育異常なく、齒生へて食物を變化して支障なきを證する場合には、第九ヶ月若しくは十ヶ月にして、全く乳を離るゝは、一定普通の法則であります。故に幼兒は、たとひ健康なりとも、未だ此の期に至らずして乳を離せば害となり、十二ヶ月を過ぎても、尙ほ乳を與ふれば、却て、母と兒とに益あることはありませぬ。されども幼兒生來孱弱にして、齒も生へず、人工食物に堪へがたしと思ふときは、猶ほ、二三ヶ月の間は、母の乳を與へなければなりません。殊に齒の生へたるころは、幼兒によりて、腹痛、下痢或は熱氣などを發することありますれば、此の時に乳を離し、他の食物を與ふる

ときは、胃腸を傷ひ、病を重ぬることになりますれば斷乳の時期に至りましても、病の癒るまでは、姑く乳を離すことを見合はすべきことであります。

斷乳の時期は右に述べましたる事情によりて、凡そ定まれることでありますが、世には、久しく乳を與ふれば、幼兒はますます強く、早く乳を離せば、いよゝゝ弱きものなりと信じ、一、二年間の乳を與ふるは通常にして、甚しきは六七年も哺乳を續くるものあり、又愛に溺れて、乳を離しがたき母親もあり、或は貧しさものゝ子澤山、再妊の憂なしと思ひ、乳のあらん限りまで之を飲しむるものもあります。此等の如きは母はもとより、幼兒まで、却て健康を害して病を引き出し、生涯不幸に陥ることになります。是れ、長く乳を與ふるときは、母親は身體の精を吸ひとられ、爲に病に罹ることあり、母親が既に病に罹るときは、其の

乳悪しくなり、水氣多く、養分は味と共に薄くなり、之を飲める幼児は、身體の生育宜しからず、諸種の疾病を起すこと、また疑なきことであります。

終に一言添へ置ますことは、幼児を戸外に出し新鮮の空氣中に運動せしむることは、何れの時にも、其の健康の爲最も宜しきことであります。特に斷乳の時期に至りては、食物の消化を奨め、病を未發に防ぎ、益々育をよくする爲には、類なき功益あるといふことであります。



ヴィクトリア女皇 (つゞき)

鄭越生補譯

かくて、女皇陛下には、追々と御壯健に、御肥立ち遊ばしまして、とき／＼その愛らしき、蔷薇色の小き頬に、無限の愛嬌をたへて、笑ませたまふやうに、なられましたので、父公爵の御鍾愛は、また一入でございまして、殆んど、しばしも御懐をはなしたまひし事なく如何に御忝戀の方々にも、女皇を抱かせたまはず、唯しば／＼公爵家に入出入をいたし居りまして、殊の外公爵一家の、御信仰あつき。或る僧正のみは、折々女皇を抱き奉るといふ、無上の名譽を、うるること

が出来るのでございませうが、夫さへ公爵は、御心配に  
たまらず、又僧正もなれぬ事とて、見るから恐々らし



く、抱きまゐらすので、猶更父公爵は、氣が氣でなく、  
立ちたり、居たり、絶えず

危ないー 危ないー

氣を附けよー 氣をつけよー

抱き上げるより、抱き下すまで、口癖のやうに、云つて  
居らるゝ位で、かざしの花ども、たなごゝるの上の珠  
ども、何とも彼ども、譬へやうはございませぬ。

其冬の事でございませうが、女皇の玉體にとり、誠  
に由々しき出来事できごとが、突然に起りました、それはつい  
近隣に住すまふて居る、百姓ひやくしやうの若者わかものが、小鳥を射やうと  
しまして、公爵邸の本立もとだちに、一發打ち込みましたいっぱうちこみが、  
不幸ふこうにして狙ねらひをわやまり、女皇の哺育室ほいくしつの、硝子障子がらすじやうじ  
を打ちくだし、折しも女皇に侍りて居りました、乳母うはは  
の肩先かたさきに打ちこまり、のこる散弾さんだんは、彼方の壁には  
ら〜と、とまりました事ことでございませう、幸に女皇に  
は、何の御怪我おかけがもございませんで、何よりでございま  
したが、一時は稚ちよなき御心ごこころにも、定めて驚おどろき給ひしこと

思はれます。

其翌一千八百二十年の春、公爵には御病氣にかゝられまして、とう／＼御薨去なさいました、初めは唯一



寸した感冒のやうで、御氣分勝れたまはずとて、御病床に入らせ給ひしが、思ひもかけず、御なくなりなさ

史傳 ヴィクトリア女皇

つたのでござります、一體に死といふことは如何なる

場合にも、よき事ではございませぬが、せめては女皇の御成人あそばし、御即位あらせられます迄も、長らへ

給ひしならば、公爵は勿論女皇陛下にも。此上なき御満足であらせられましたらうに、天壽と申すものは、貧富貴賤に論なく、人方の如何ともすべからざるものと見へます。

是より二三年程、しまして、女皇は例の如く御事に召させられ、小さな驢馬に牽かせつゝ、近郊を御散策なされて居られました、馬は何に驚きか、一散にかけ出し、如何に手綱を引きしぼるとも、止まらばこ

と、とう／＼御車を泥溝の中に引き込みましたので、女皇は眞逆に墜下せんとしましたが、此時遅く彼時

速く、下より女皇を抱き止めたものがございました、それは折よく、此處を通りかゝりし、一青年軍人が、それと見るより、蒼惶しく駈けよりにて、女皇を救ひ参らせたのでございます、此時この軍人は、若干の金子を頂戴して、御賞賛にあづかりました、後女皇御即位なされてから、程經て一千八百七十八年、此軍人の老夫妻は、憐れなる境遇に陥りましたので、據なく七十年前の此出來事を口實に、養老金を歡願に及ばれました、そこで女皇は有史に命じて、篤と事實を御調べになりましたが、固く眞實でございますから、誠に氣の毒であると仰せ出され、終身年金を老夫婦に與へられました、仁露枯木に及ぶとは、かゝる有難き事を申すのでございませう。

かくだんく御成長あそばすにつれ、將來大國の君主たるべき御氣象は、自然に備はりまして、殊に仁慈

の御心深く、貧人や孤獨の人を見ては、常に不慥に思召され、同情の御涙禁じあへたまはず。

是は其一例でございますが、或日女皇には、保姆に伴に、御散歩なされておられました道に、賤しき乞食を御觀になりまして、慥れと思召されて、

貧人！ 貧人

と仰せられ、一シリングの銀貨を、御與へなされました、するとこの乞食は、一方ならず仰天し、且つ有難くて、しばし呆れて居りましたが、感極まりてか、矢庭に女皇を抱き上げ、熱き接吻を涙とともに捧げました。

是れ亦一例でございます、女皇一日或る人形店にて、人形を御購めになり、いそぐとして、御歸りにならんとする途すがら、一の貧人に出逢はれました、貧人は聲も細くいふやう、

高貴の姫君よ、憐れなるものを、救ひたまへや、

女皇はつく／＼と御覽になりまゝにて、可愛とうであるが、生憎今人形を購めたので、金子はなし、困つたとであるど、御心配になりましたが、如何ともせん方がございませんで、

氣の毒だが

と、御斷りになりましたので、貧人は世にも失望したらん如く、立ち去らんとしますと、女皇は急に氣づきたまひし如く、

御待ち、御待ち、今あげますから、

と云ひすてたまひ、最前の人形屋にと戻りたまひ、買ひ戻せよと仰せられました、人形屋では、不思議に思ひました、大切の御得意さまでございませすから、快よく金子を、御返しいたしますと、女皇は御喜びなされ、直ぐ貧人に、そのまゝ、御輿へになりました。(未完)

ローランド夫人 (ついで)

鄭越生補譯

幸にして、ギロンド黨の勢力漸く強く、一千七百九十二年の春、同黨員の多數により、新内閣の組織せらるゝに及び、ローランド氏、入りて内務大臣となる。當時人々唯家を懐ひ、公徳地を掃つて求むべからず、賄賂公に行はれ、苞苴夜る門に忍ぶ、百官悉く公盜、僚屬悉く汚吏、一世を擧げて、銅臭紛々たるの時、氏の如き、公正廉潔なる國士を得て、閣臣に列す、新内閣のために、大に喜ばざるべからず。

然れども、莊嚴傲慢を以て、歐洲に名高きルイ十六世王の佛蘭西宮室、今や俄に此の一野人を迎へんとす、滿廷の驚異抑々幾何ぞ、昔者平忠盛昇殿を許されて舉朝側目反齒しき、地を異にし、風を同じくせずといへども、事實に於ては一なるべし。

今日は新閣臣が、始めての新見日なればとて、恭しく出で逃へける式部官等は、遙に畧帽を冠し紐靴を穿ち、一見禮に嫻ぼざる野人の如く、見苦しくも、参内せんとするものあるを見て、何人なれば斯くは宮中を汚したてまつるぞと、誰呵しけるに、見苦しき人平然として軽く曰く内務大臣ローランド……式部官等相顧みて呆然なす處を知らざりしと傳ふ。

かくて氏の就職するや、厩精國務に任じ、治績大に見るべきものあり、是れ氏の勤勉と天才とによるは勿論なれども、然れども氏よりも一層伶俐卓見なる夫人の助言、與かりて大に力を添へしは事實なるべし。

當時夫人の勢力は、誠に偉大にして、雷に其良人を助けて、政務に奏功せしめたりしのみならず、廣く天下の政客に對し、感化を與へたりしこと少なからず、夫人常に一小室を劃して、自己の客室となし、終日天下

の政客を送迎し堂々として國家の經綸を論じ、嘗て倦む處を知らず

是より先き、十六世帝の施政、大に宜しきを得ざるものあり、黨人の怨望ますます甚だしく、是に至り危機漸く王の一身に迫らんとす、ギロンド黨人、大に之を憂ひ、王に與ふるに、反省の材料を以てし、之によりて危機を豫防せしめんとす即ち、ローランド氏筆をふるひ、侃々として施政の不可なる所以を論じ、さて曰く王にして、もし反省する處なくんば、必ずや危害の王に及ぶものあらんと。

幸に、王にして斷然意見を改め、此莊重なる苦諫を嘉納し玉ひしならば、正に來らんとする危害は、恐らく王の身邊を襲はざりしならんに、王の明是を之れ察するに足らず、竟に黨人をして、佛國革命史の上にひしる世界人道史の上に、千載塗沫すべからざる汚點



を印せしむるに至らしめたるは、かへすくも遺憾の極みなり、而して氏の建白書の進達せられたるは、實に一千七百九十二年六月十一日、氏が辭職の急命に接したるも、また此日なり、嗚呼王の頑冥不靈なる、畢竟濟度すべからざりしなり、

かくて事はいよ／＼六ツかしくなり行き、月を越へて八月十日、慘劇の序幕遂に開始せられぬ、王のテムブル獄に下されたるは、實に此十日といふ凶日にてありけるなり、是より先き、王は外國に逃れんとし、捕へられて、チユイレリー宮に禁錮せられしが、此時チユイレリー宮、亦暴民の襲ふところとなりたれば、王窘迫、逃れて議院に入り、保護を乞ふ、議會は即ち王に宣告するに、王權停止を以てし、テムブル獄に下したるなり、是に於て佛蘭西の政體全く一變して共和政體となり、共和黨聯合内閣組織せられ、ローランド氏

再び入りて閣員に列す。

斯くの如く、共和黨の希望全く達せられたれば、國民漸く堵に安んせんとし、ギロンド黨、亦漸く諸種人權の振張を實現せしめ、以て革命の實果を收めんとし着々として施政に専らならんとす、然るに山嶽黨人はこゝに鋒鏑を偃するを欲せず、憤然として、ギロンド黨に反し、激烈不穩なる決議を、ジャコピン俱樂部に結び、ジャコピン俱樂部は彼等の集會密議する處なり。

満都唯々聞寂、弦月青く西方地平線下に落ちんとすこの時にあたり、布片以て孤燈を蔽ひ、朦朧たる暗中、人影四五、或は六七、一脚の卓子を圍みて、首を鳩め低く且つ低く、云々し、復た云々するものあり、是を之れジャコピン俱樂部密會の光景となす、眼光閃々、口角深く裂け、一見人をして、股票せしめんとするは

恐らくロベスピエールなるべし、眉を蹙めて、頭を眩に支へ、沈思之を久しくするものは、恐らくダントンなるべし、議する處抑々何事ぞ。

ギロンド黨、全力を盡して、其過激なるを戒しめ、頻りに中和を試みたれども、行はれず、加之議會の勢力次第に山嶽黨に吸収せられ、竟に多數を制せらるゝに及び、また如何ともする能はざるに至りぬ、斯くの如くして我謂九月の殺戮に到達す。

九月の殺戮……吾人今是を筆にするだに、なほ醒風机邊を襲はんとす……ほゞ、世に慘刻なるは又どあるべからざるべし、生民の命を墜したるもの、幾何といふを知らず、血は流れて川をなし、骨は積りて山をなす、晝暗く鬼啾々

山嶽黨人の狂や、いよ／＼出で、いよ／＼狂、翌一千七百九十三年正月二十一日、王を以て佛蘭西共和國

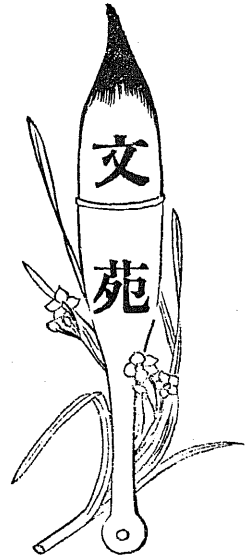
の公敵となし、竟に死刑に處す。

是に至り、ローランド氏は、時局の救ふべからざるを看破し、越へて一日、内閣を辭す、こゝに於てギロンドの勢力全く地に落ち、再び收拾すべからず、嗚呼竟に終局の勝利は山嶽黨の手に歸したるなり。

此時ローランド夫人、書をその親交ある知人に寄せて曰く「吾等の生命は、ロベスピエールのナイフの下にあり」革命に對する余の主張は全く破れたる」云々、夫人の憤慨想ふべし。

(未完)

かれ果て、一月も宿らぬ柳かな



斯情と斯涙

(子守學校卒業式)

長野 飯島八千溪

免狀も渡し、賞品も與へ、式は全く終つた。五年生の一人の子守、列を排して、教師の前に進んだ。満場の視線は皆之れに集つた。溢つた聲で

「先生」

頭はガクリと前に垂れた。足元潤す涙數滴。此時イト柔な言葉で

「お前はどうしたの」

此言葉に勇氣づき

「永々お世話様になりましたが、モウ今年は……」  
震へた聲、どざれ〜の其言葉。

「アノお前が……」

と云ひも終らずうなだれ、兩睫の潤ふも覺えず、暫時無言で有つた……ふと氣を取り直し

「お前は どうして 下るの」

「ハイ今年いま一年お世話になりましたら、裁ち縫ふ事、読み書く業も一通りは、未熟でも出来やうと、楽しんで居ましたに……先頃、國許の兩親から、今年は是非にかへれど……親の言葉に従へば、朝夕先生に、教へて頂くことが……又先生に、教へて頂かうとすれば、兩親の言葉に……、どうしたらよいかと、國許から手紙の來空した日から、朝晩只獨りで、隠に廻はって、涙に暮れて居るばかりで……」  
「アアアお前は誠に、うい子じや……、お前は未だ

年も若く、先きも長いから、又修業の出来る折もあらうが、親は年も老い、先きも短かければ、一日も早くかへつて、よく孝行をするがよい……」。

「ハイ有りがどうムります……夫れでは先生、さう致しますから、せうぞ今迄通りに……何れ、ふだんの様子手紙で……」。

「アイわたしの方からも、亦度々」

「左様ならお暇を……」。

「アー夫れでは、お前は之れで……随分身體を大事にして、女の道に背かぬ様……」。

「ソンナラ皆さん」。

今迄二人の話に、頭上げかねし數十の子守、恰も堤の破れし如く、萬雷の一時に轟けるが如く、一度にワット聲あけて、

「アー花ちやん」

と取り圍んで

「アーアー寒い時も暑い時も、かなしい事も嬉しい事も皆一所にしたものを、今日之れで……」。

オイ〜と諸聲に、前後も知らず泣き入った。

何の事やら無我無心の背中の乳子、アツケにとられてサツキにから、目をバチ〜あたりをキヨロ〜見まはして居たが、やがて

「あねーお宿へ」

と二三回繰り返した、此聲に初めて己れに歸り、

「アーあねのめ、しい心から、ぼっちやんに、お腹をおすかせ申した……夫れでは、皆さんおまめで……」

「先生わたしどもが一所に送って……」

「オーさうども〜……」

お花は今や、數十の守に擁せられ、一同しほ〜と校門を出でた、足音遠くかすかになつた。

# 才女

多梅稚作曲



ひーとよーくひなのただならず  
スーダレーカカグテモロコシノ



たーたくつまどはざわげども  
クシキモウーカブコウロホウ



こころーはーすめるーつきかけに  
メツキーグーモキニータカキナハ



ひーとのみちなばてらすなり  
チトセノノチマアカチルナリ

才女

新保磐次

(一) 一夜水鶏の只ならず

敲く妻戸は噪げども

心はすめる月影に

人の道をば照すなり

(二) 簾掲げてもろこしの

景色もうかぶ香爐峯

立つや雲井に高き名は

千歳の後まで薫るなり

(轉載を禁ず)

後見送おきおくつて玄關げんくわんに出いでた教師けいし、遙はるかに彼等かれらの後姿うしろすがたをチツト見みつめて居ゐたが、遽にはかに首かぶをうなだれ、掌たなこもて額ひたのを蔽おほうた、……左ひだりの袂たもとより、ハンカチーフを取り出いだし、目めを押おし拭ぬぐひ、

「アー彼等かれらの様やうな、不便ふびんなものを長く世話せわすれば、別わかれの情じやうも亦また一層いちじやうせつないものだ、斯かる時ときこそ人の眞ま情じやうは、顯あはるゝものだ、夫せれに付つても、アレが、最さい前ぜんの言葉ことばの様やうに、一生しやうじふ邪路じやろに迷まよはずどうか立派りつぱな出世せを……」

と低ひくい聲こゑで、獨ひだりり言ことばを云いつた。

## 母のこころ

### す み れ

天地あかづちの間に、生きどしいけるもの、人は更さらにも云いはず、鳥獸ちゆうぶつに至いたるまで、皆母みなははの暖ぬくかなる心こゝろに、浴あせざるは、

あらざるべし、まかはあれども、富とめる人に比ひべては、貧ひんしきものゝかた、その心の切きなることは、まざりてなん見みゆる。我が宿しゆく近く、車くるまひく事ことを營なりほとせる人あり、その日ひそのひの、たづきにも、事こと缺かく有あれば、まして三人さんにんまである、女の子おんなこの身の回まわりの、とやくべくもあらず、去年こぞのくれ、隣となりなる家の兒こらが、新あらたしき年の料りやうにとて、調しらへし衣いの、うるはしきを見み、我われ子この上うへの思おもひやられてにや、狭せまき心に堪たへかねけん、母ははは遂ついにに病びやうの床とこに、臥ふしたりき。

愚おろかなるに、似にたれども、教おしへなき婦女ふにょにしあれば、さもありなんと、我われはいたく心をうたれたり。

我子われこ遠とほき國くににあるを、故郷ふるさとなる母君ははきみは、朝あな、夕ゆふな、神佛かみぶつに祈いのりて、我われが爲ために幸さい多たかれとのみ、願ねがひ給たまへり、さるは雁かりの便づかりに事こと寄よせては、怪あやしげなる文字もじにて、「びやうさせぬよう」との御言葉ごことばを、見みざるたびもなし、

偶々歸省しつれば、たどしへなき喜びのゑがはもて、  
 我れを迎へ給ひ、さて、出立たんとすれば、又來ん年  
 の歸省を、待つぞよと、繰り返し給ふ。なべて世の、  
 子もたらん、はゞの母は、一時のまも、心のやすま  
 る事は、あらとぞ覺ゆる、されどそれ中々に、樂み  
 の一ツに、かぞへ入るゝものぞ。此暖かなる母の心  
 の、限りなきを思へば、孝養を缺ける、我身の恐しさ  
 も身にしてみ、いづれの世にか、此厚恩を報い盡す事  
 を、得んとこそおもはゆれ。世の子女たち、心して、  
 ゆめ孝行をな、怠り給ひそ。

櫻ともみぢ

さくら

朝日にはふさくら花  
 そをはくくむは春霞かすの  
 花より赤さもみぢばを  
 そめ織りなすは秋の霜しも

文苑 母のこゝろ 櫻ともみぢ 母と妹 春の山

さくらの如き頬ほのいろ  
 もみぢ色なる赤心まごころを  
 そをはくくむは誰ならん  
 染め織りなすは誰ならん

母と妹

小林つね

嬉しきものはうらくと  
 ひばりの歌をきながら  
 はなのたもとにあまる迄まで  
 かせべにまねく母ははきみの  
 心こころの春はるをあたゝかき。  
 かすむ春野にうちつれて  
 妹いもとたのしく母子はごくさ  
 つみて歸かへればわがやゞの

春の山

東くめ

白妙しらたかの衣きぬ  
 薄紫うすむらさきの  
 たちかさねたる  
 ぬぎすて、  
 八重かすみ  
 山々の

春のよそほひ

見よや人

\* \* \* \* \*

霞のころも

ほのすきて

ひまより匂ふ

花がさね

昨日にまして

うるはしき

山の姿を

見よや人

蝶

同

人

散る花をおのが友とやおもひつゝ

木かげをさらず蝶のまふらん

柳

同

人

青柳のいとまもあらず拂へばや

池の鏡のちりもくもらぬ

晩

鐘

同

人

事無くて今日もすぎぬときく身には

たのしくひやく入相のかね

春 月

和 歌 子

梅の花ちりしく庭に春の夜の

月もおぼろのかけそかをれる

水邊 柳

同

人

青柳の糸よりかけて池のおもに

水色きよくかけくらふらん

春日亡友を思ふ

同

人

としことにちりてまたさく花のこと

かへしやせまし君がおもかけ

山 霞

同

人

あしびきの山里遠くたなびきて

烟にまがふうすかすみかな

霞

同

人

いせのあまかしはやく烟とばかりに

磯やま松のかすむ春かな



海邊春望

和歌子

青海原見わたすかぎりかすみけり

あまの小舟のからるもれつゝ

題しらす

同人

わたづみの千ひろふかくも思ひやる

うかぶうき世のすゑやいかにと

\* \* \* \* \*

湯島の天神に詣うで、 撃 水

外國の人に見せばや日のもとの

はまれと薫る梅のはつはな

花見の宴

同人

酔ひしれてくるひたはるゝ人々を

あさましとてや花のちるらん

夢に亡友を見て

同人

鳥羽玉のゆめにうれしき面影は

さめて果敢なき涙なりけり



母にわかれし乳兒 ながし

たらちねの母をまたひて泣くちこそ

膝にいたきてわれも泣くなり

つひになき母ともまらでみどり兒は

牛の乳すゝりけふもねふれり

悲しさを語らん人もあらくに

母をまたひて乳兒を泣くなる

いねかてに母こふちこの夜泣には

いにしみたまも迷ひきぬらん

うえて泣くかわか手枕のものうきか

母なきなれを守る夜かなしも

母うせて飲ます乳さへまゝならず

子のゆく末やいかゝあるらん

故さとにわかにもうどあり姉もあり

つれてかへらん母のなき乳兒



勅題雪中の竹

南越 雪堂生

吳竹の高き操そ知られける

つもれば拂ふ枝の白雪

同 同 人

降る雪になびけど折れぬなよ竹の

やさしき姿千代も榮えん

霞山衣 同 人

雪きえぬわらちの山も春すぎて

かすみの衣たちはしめける

谷 風 同 人

さよ嵐つよくも吹くかたにの戸を

まはしくたしく問ふ人なしに

餘寒風

増野やす子

立そめし霞はさえて又もとの

冬にかへりて吹嵐哉

春 雪

田中みの子

冬のうちはまたれし雪の春立て

けさめつらしくつもりける哉

雨中紅梅

木原庫子

降となくふる春雨にぬれくし

こそめの梅のなつかしきかな

山春月

中村禮子

又更におきしろきかな櫻かり

かへる山路のおほる月夜は

閑 居

庭田長子

鳥かげのまどのさす日もとふ人の

なきをならひにくらす宿哉

# 説林



## 女子は男子の所有なるか

洋々生

一般に我國の女子には、科學的、數學的思想の缺如せることは、おとらく何人といへども認むるところなるべし。之を女學校の學科課程に見れば、修身、國語、地理、歴史、數學、理科、圖書、家事、裁縫、音樂、體操等、其他隨意科として、外國語及諸種の手藝を加ふるものあり。たゞ之に由りて見むか、一見異論を押し餘地なきが如し、何となれば、課程表に於ては、一

説林 女子は男子の所有なるか

方に文學的學科あり、一方には理科的學科あり、而して又、女子に必要なりとせらるゝ諸種の知識技能の加ふるものあればなり。然れども、現今の女子教育に付きて、詳に其實際を觀察する時は、いはゆる女子の學問なるものは、專文學的に偏し、又大に遊藝的に傾けるは事實なり。

蓋男子と女子とを問はず、所謂普通教育なるもの、趣旨は、人をして調和的の發達を遂げしめ、各自が天賦固有の本分、社會必須の職業を盡すに要する知識技能を得しむるにあり。而して、現今高等女學校及其以上の學校に入り來る所の女子たるや、小學時代よりして、既に女子として教育せられたること數年其他、社會の因習、家庭の風儀等に依りて、疾くに女子としての一種の偏倚傾向を有せることは疑ふべからず。然らば、之等の學校に於て、特に女子に授くる學科目等

の内容は、これら女子の既に有する偏倚傾向を正して圓滿の人たらしむるものならざるべからず。併も現今文學的に偏し、遊藝的に傾ける教育法は、この目的に沿はざるのみならず、反つて益其偏倚傾向を大ならしむるもの、抑また、女子の本分天職を盡すが爲の知能を與ふる點に於ても疑なきあたはざるなり。

吾人は、古代文學を以て、不用の死語として、其有する凡べての價値を滅却するは、もとより正當ならずとすると同時に、現今の如くに、女子なればとて、凡べての他の學科を輕視して、獨り、古語歌文を重せしめ、従つて、女子をして何をすて、も源語古今に通せざるべからずと誤想せしむるに至れるを難するものなり。吾人は、茶の湯、生花、音曲等の品性修養上に於ける効益を非認せんとするものにあらず、併も女子に求むる所の資品才能を殆んど、これらに限れる如き今日

の傾向に反對せざるを得ず。

要するに、女子教育に於て、尙未だ今日の實情を存する限は、「女子は男子の所有なり」との昔日の惡觀念は、其跡を斷たざるものなりといはざるを得ず。女子もとより、此思想を以て自ら甘んじ、教育者また、この思想を以て女子を教育せんとす。嘆すべきの至りなり。

黒田氏の兒童の道德的訓練及單念士の女子の職分は、筆者の出張或は病氣等の故を以て遂に本號に掲載するを得ず。次號に於て續くること一せり乞ふ諒せよ。



# 研究

## 臺灣の昔話 (承前)

町田 則文

### 第三 動物に關する談話

- 一、猿蟹合戦の話。
- 二、非望を抱ける鱸魚、烏に攫まれて上天し忽ち放下せられて死せし話。
- 三、虎あり、人の形に變じ人を謀殺せんとして、反て人に謀殺せられし話。
- 四、猫と虎と争ひ、猫は犬を仲裁とせしが、後、虎は犬を殺せしも、猫は獨り免かれ、他の犬の怨を受けし話。
- 五、水牛と虎と闘ひし話。
- 六、水牛あり、身を支那に置き頭を伸ばして、臺灣に至りて、草を

食ひし話。

- 七、三足の鷄ありし話。
- 八、三目の猪ありし話。
- 九、鷄は鴨を誅めて死せしといふ話。
- 十、大稻埕に一牝豚あり、兩頭の豚を生みし話。
- 十一、鼠の猫を捉へて竹桿に上りし話。
- 十二、蛇の田哈を咬みし話。
- 十三、牡猫の子を生みし話。
- 十四、鷄は鴨と戦ひし話。
- 十五、鱧の蛇を食ひし話。
- 十六、鳩山に入りて、米を食し、歸來の後、尋ねれども何物も無かりしと云ふ話。
- 十七、蟾螂蟬を食はんとして、後に雀の窺ふを知らず、蟾螂を食はんとして、後に人の之を取らんとするを知らずといふ話。
- 十八、鳥虫を食はんとして、後に猫の窺ふを知らず、猫鳥を食はんとして、後に大鴉の窺ふを知らず、會々狂犬相咬むあり、驚きて皆四散せりと云ふ話。
- 十九、猫と鼠と遊びし話。
- 二十、虫は鷄に啄まれ、鷄は鶴に拿へられ、鶴は犬に咬まれ、犬は水に陥りて死せりといふ話。

二十一、地下に大牛ありとの話。

二十二、臺灣の拳頭武山の中間に一寺あり、左右の兩樹に、鷺と鳥と巢を結び相争ひ、後附近の農民之を和約せしと云ふ話。

二十三、犬人を生みし話。

右は概して愛笑的の事實なれども中に教訓的の意味を含むものなきにあらざ、乃ち之によりて、分類せば、

(イ) 教訓的の意味を含める話

(ロ) 愛笑的の意味を含める話

なりとす、中に就き水牛の身を支那に置き、頭を伸ばして臺灣に來り、草を食ひしといふは、支那本土と臺灣との、接近する觀念を表示する者といふを得べきか、又拳頭武山に於ける鷺鳥争鬪の事は、臺灣の或歴史より、轉成せる關係あるやを認む、よりて該談話の全文歴史の概要とを左に比較掲記せん。

(談話)、本島の拳頭武山の中間に一寺あり、左右の兩樹は均しく皆鳥巢なり、其鳥は二様にして、一を白鷺鷥とし、一を烏鴉鳥とい

ふ、毎年二鳥は巢を争ひ各々其羽翼を會し、兩隊相打ち死亡殆ど盡きんとし其羽毛山野に遍れし、後來附近の農民爲めに和約して争ひ止めり。

(歴史)、宜蘭西南の大山脈麓に拳頭母山といふあり、此山邊より直行せる一線の山中、灣頭南灣と稱せらるる兩蕃族の中間にして、其左右には、乃ち幾多の蕃社あり、嘗て此兩蕃は鬪殺を繼にして、永く和せざりしが、土人陳輝煌といふもの、酒を山内に設け兩社の頭目を召し同く飲みて和睦を爲さしむ。

中に就き鼠の猫を捉へて竹桿に上りし話、蛇の田蛤を咬みし話、鷄と鴨と戦ひし話、は二人同伴なれば、最人口に喰灸するものなるべく、是亦其原由を知らんと欲する所なり。

而して之によりて、凡臺灣人の普通知識が動物の上

- 有脊動物には
- 猿、鳥、虎、猪、鱗、犬、鷄、水牛、豚、鵝、鴨、鼠、馬、
  - 鰻、蛇、鳩、蜜、蠶、牛、
- 無脊動物には

## 女子に就きての所感

### 南越 雪 堂 生

古代は、女子に學問をなさしむること少なかりし故、無智の者多くありたり。されど近來に至り、盛に女子の教育を勧められ、女子も男子と同じく學問することを得ることなれり。是れ偏に明治聖代の恩恵とこそ謂ふべけれ。然るに今日の女子の學問は、兎角根本的の學問、則ち心を治め、身を修むることなどに力を用ふるもの少くして、唯枝葉的の學問、即ち詩歌、文章、音曲、茶の湯、生花などにのみ、力を用ふるもの多き傾あり。故に當時の女子は、概して、奢侈に流れ、外貌を飾り、氣分のみ高く、髪は洋風を真似び、身には黒紋付の長羽織を翻へし、我こそ女丈夫なれと揚々然

研究 女子に就きての所感

として耻ぢざるものあり、誠に見苦しきことの限りにこそあれ。

余嘗て聞きしことあり、或る豪家に一人の娘あり。或日、主人按摩に身體を揉ませつゝ、言へる様、我娘は、幼き時より琴三味線はいふに及ばず、其他の技藝も、一通り習はせ、その上學問も少々は出来る様になりたるが、最早年頃に及びたれば、相應の家に縁付かせたし云々と、述べければ、按摩は、いと感心しげに口を開き、おひねりも出来ますかと尋ねれば、主人は尖り口上にて、憚りながら、此家にては、按摩の稽古は不用なりと答へたり。此時按摩は、冷笑して、語をつぎ、如何なる豪家の嫁にても、舅姑などに、病み煩ひのありたる時は、背腹を撫で充分に看護すべきが、女の道には非ずやと言へば、主人もこれには閉口したりきといふ。

世には、かゝる不心得の親達や、又足袋のつぎさへ、碌に出来ぬ女子を往々見受けることあり、此等はいとも嘆かはしきこともなり。

凡そ女子の學問とは、所謂読み書き算盤なごにのみ止らず、根本的の學問によく心を用ひ、和順なる徳性を養ひ、而して枝葉的の學問に取り掛るべきも、先づ日常女子に必要な裁縫のこと、洗濯の仕方、按摩の稽古、又料理の法なごをも心得置くべきこと肝要なり。若しこれ等の事に疎くば、假令、如何に學問に通達せりとも、女子の務には缺けたりとやいはん。世の女子たるもの、深く我身を顧み、人の毀を招かぬやう慎むべきことなり。

讀者幸に文の拙劣を咎めず參考の資に供するを得ば幸甚。

盛岡地方の手毬歌、お手玉歌(承前)

盛岡 山村 材美

一、せんだいの、せんだいの、あまが娘は善い娘、赤地の小袖に茶の袖、裾をまいたり、着流して、しよなら、しならど行く所、親は見てさい、善いと見る、まして他人は唯惚れば、たいもはれらば晚御座れ、晩の枕は、何枕、東枕に窓の下、戸の下から、そろりそろりと、手を延べて、此處は名代の金處、たいさまめかて、何に積む舟につひ、舟は沈んでなるならば、脇差刀は、おどつあんえ(父え)葛籠三ツはおかさあんえ(母え)化粧道具は姉さんえ、おらが姉さん、面も洗す、髪も結はず椿油で、せうろせうろ、一ちよう〜。

一、おん正、正、正月で松立つて竹立つて旦那の嫌いな大三十日、一夜明れば元日で年始の御祝儀申しませう、小僧や小僧や、お茶持て来い、吸物なんぞも早



よ持て来い、向ふの、おばさん、ちよいとお出、お芋の煮ころがし、お茶あがれ、後で、おならは、御免だよ。

羽子

おほうり、お羽子、御羽は十三、九ツ、十、澤ア邊、

金成、若柳、若くて、はねるは白兔

七夕

今年豊年萬作で、楯で計らなえで、箕で計つた…

若い衆、たのみませう、まわりはね、おちよ子さん、

あれ見らせ。これみらせ。

螢狩

一、螢さん、おいとしや、夜は、ぼんぼり高提燈、晝

は草葉の露の蔭。

二、螢さん、山見て来い、行燈の光を、ちよいと見て

来い。

三、螢さん水飲め、彼方の水は苦いぞ、此方の水は甘

研究 盛岡地方の手毬歌お手玉歌 駿河地方の子守歌に就て

いぞ、なんぼんばたけの螢

鬼遊

れいれえれば、かさうり雀、あぶらひき鳥子、つゆのめちりん。(ついで)

駿河地方の子守歌に就て

駿河國大宮町 加藤伊砂吉

余は我國の子守歌の多くを見て、我國幼兒保育の主義が子守歌に依りて、明かに窺ひ知らるべしと信ずるものなり今左に大宮町附近の子守歌二三を擧げん。

其 一

「ねんねんよー。ねんねんよ。ねんねの子守は、何處往った。山を越して。郷いッた。郷の土産に何貰った。でんでん太鼓に笙の笛」

其 二

「ねんねんしなされ。ねんねんよ。泣くと長持脊負せ  
るぞ。起きると興津へくれてやる。寐いると根方(山の  
根方)（山家の）へくれてやる。こんな良い子を誰かマツた。  
誰もかまはぬ一人泣。一人で泣くのに仕様がない。」

其 三

「ねんねんよ。ねんねんよ。ねんねの子守は。何處  
いた。神田の町へ。帯買いに。帯は何帯小倉帯。く  
けておくれよ妻女さん。くけてやるのは易けれど。

此の子に泣かれてくけられぬ。明日雨降り川が出る。  
此の子を流してくけてやる。

讀者は右第二第三の如き歌を見て、如何に思ひ給ふ  
や、初は賺す、次に驚嚇、次に放擲、何たる無慈悲ぞ  
や。

而し近年或新聞紙に見へたりとて左の如き歌を唱ふ  
者も多し

「坊やが大きく成つたらば。宅で作りし馬に乗り。海山  
越えて里こえて。劍の林も切抜けて。彈丸の霞も顧  
みず。金鵝勳章胸に掛け。おぢいさんと。おはあさ  
んに見せたいな。」

何と其れ面白からずや幼児には理解すると否とを問は  
ず、そを唱ふ子守の心を耕すこと多きはあきらかななり。  
左に江戸の子守歌二三を擧げん讀者諸君の御熟讀を  
乞ふ

其ノ一(母の歌ひし如きもの)

「坊やはいい子だ。ねんねしな。坊やの可愛さ限りな  
し。天に例へた星の數。七里が濱では砂の數。坊や  
はい子だ。ねんねしな。」

其ノ二(乳母……)

「坊ちゃんはい子だ。ねんねしな。明朝は早く御目  
覺めよ。お乳汁の出初を。たんどあげよ。坊ちゃん

はよい子だ。ねんねしな。

其三(生母乳母共通)

「坊ちゃんはいー子だ。ねんねしな。ねんねこあんこ餅幾代餅。助總銅羅燒。米饅頭。坊ちゃんはいー子だ。ねんねしな。」

(終り)

## 小兒の言行

芙蓉

或人が移轉をするどて、家を探して居る話をして、三田の方に、庭も廣くて、大層よい家が御座いましたから、早速問合せますと、彼方、否な事には、楡首が有つたのだそで御座いましてね。といふを、少さき妹の小耳に挟んで、姉ちゃん鞦韆があれば乗つて遊ぶのにいゝのにねー。なせだろうねー。

姪の五つゝになれるが、叔母様の名は、祖母様の名

は、と次第に問ひて、最後に、祖父様の御名は三次と、よく覺へたりしが、暫して祖父の入來られしを見て、祖父様、私祖父様の名を知つて居てよ。といふ何といふて見よ。と云はるれば、あの一時計さ。

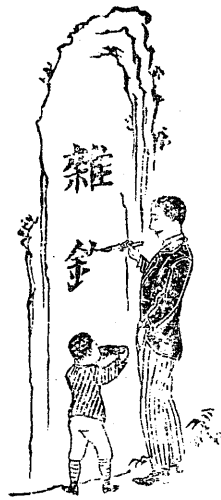
是も、同年程の男の子に、繪解をして、汝に出て汝に反る。と云を教へしが、數時間の後に、前の詞を覺へて居るや。と問へば、暫く考へて、幾時に出て幾時に歸る。と答へぬ。

茲年三歳になりし女の子に、お前の生れた日は何日。と問ひしに、何と思つてか、オギャ〜といひぬ。

或男子下女に負はれて、縁日に行き、賣卜者の人立せるを見て、買つておくれよ。買つておくれよ。とせがむ。でもあれは、賣卜ですもの。といへば買らないなら只見て行かうよ。

第十歳の時兄妻を迎へぬ。或折母は、お前は小舅な

れば。どいはれしに、何故と弟の間返し、かば、お前も姉様も凡べてお前方兄弟は嫁に對して小舅とはいふなり。と説明れしに、では兄さんも小舅かへ。



花の時

臥龍、江東の梅花既に過ぎて、更に、墨田飛鳥の櫻の時期となりぬ。急がしかりし學年末の試験も片づきて、こゝ數日は、まさに身體の休養の時なり。學生にとりては、一年中眞の正月休なり。一日の閑を造りて、行いて野に山に散策を試みんか櫻花の空、菜黄の畑、微風の身にそよぐ、告天子の天に轉る、何れか心

目を喜ばしめざる。行け、墨田は既に、嬢を待てり、飛鳥も待てり。若し夫れ、飯田町を發し、往復三時間の流車を藉りて、小金井に遊ばんか、見渡す限り爛熳たる櫻花は、清流をさし挟ひて并ぶ。積日の鬱を散ずるは、まさに今日この時。大に鬱を散じて而して將に來らんとする炎熱に向つて、大に心身の銳氣を養はれよ。

思ひ出るまゝ

仙臺から北へかけて、盛岡、北海道に至るまでは、殆ど半歳の間、雪に埋れて居る有様なれども、花見には最も屈竟の地方なり。梅は四月に至るも尙開かず、況んや櫻花をや。東都に在りて、漸暑を覚え、重衣を脱せんとする五月の末の方に至ればまさに此地方の春の最中にして、併も、東都以西の人の見るを得ざる梅櫻桃李百花一時に開く奇觀を呈し、殘雪は、たゞ遠

の山の端に名残をどゞひるのみ。

▲言葉の訛りは、特に仙臺附近を最甚しとす。試みに瀛車中に在りて、賣り子の呼び聲を聞け。

すんぶん(新聞)は、いかゞー!、まんづう(饅頭)

にあんもつ(餡餅)はいかゞー!、おす、は、いかゞー!

▲某陸軍大佐の話なりとて、或人の語らるゝには、大

佐は、京都ステーションにて一等瀛車室に乘れり、同

乗人には、他に外國人の紳士夫人を伴へるあるのみ、

折しも、ある金満家の若旦那らしき身なり立派に装へ

るが、數多の見送人に送られて、こゝに入り來れるわ

り。汽笛一聲、ごきげん宜しうの聲を後にして七

條ステーションを發す。大佐は、椅子によりて新聞を

讀みつゝあり、外國人は夫妻にて、互に何か語りつゝ、

ありしに、例の立派の若旦那は、折しも、夏の半のこ

とて、羽織を脱ぎ、帯を解き、遂には衣服を全く脱

ぎすて、忽丸裸となりて、脱ぎすてたる衣類を疊

みにかゝりぬ。外國夫人は、顔を眞赤にして、夫に何

事かさゝやきて、窓外に向きぬ、紳士は、一寸裸の方  
を眺めて、顔をしかめながら、これ亦戸外にそむけた  
り。

此際大佐は、この破廉恥なる舉動を見て、恰我軍隊  
の恥辱を、外兵の前に曝されたるが如くに感せしが、  
さりどて致し方もなく、しばしは、彼のせん様を見居  
たりしに、彼は何の考もなく、悠々として、カバンの  
中の單衣と着代へ終り、やがて次のステーションに來  
るや、忽この室を出で去りぬ。暫して、と見れば、彼  
は以前に似合ぬ粗服して三等室にて、高談放笑しつゝ、  
ありき。如何に無教育の致す所とはいへ、今少し帝國  
の體面を考へられたきものなりと。

一友傍に在りて曰く、なるは京都人には、あり  
そふな話なり。



ストライキ節

東雲のストライキ云々の歌詞、一向に分らず。さりとば、何の意味なるかどさましく考へたる結果は、次の理由のあることを聞き出した。

一時、自由廢業の盛なりしころ、芳原の一娼妓東雲と呼ぶ者、廢業を思ひ立ちて、交番にかけこみしに、手續に手落ありとて、警官より樓に歸らんことを、説諭せられし折、彼は涙に咽びて、「歸るは歸るが、さりとば辛いね」と語りしか。之より遂にストライキ節となりて、今や全國の丁稚小僧より堂々たる紳士令嬢に至るまで、口にせざるなきに至り、さしも流行を極めたりし大和田氏の鐵道唱歌もこれために壓倒せられて、後に撞若たり。嗚呼我が邦人の音樂的嗜好は、一代の文學家の作を捨て、然もこの不祥なる一賣女の片言に同情を表することの多きか。さりとば、まことに辛しといはざるべからず。

禿頭病

禿頭病勢ますます逞しく、この姫君、かしの學生までも、この病の襲ふ所となりたりなど、日々の新聞紙に傳へらるゝに至りぬ。不衛生極る女髮結の手にかゝらざることを、最必要なることながら、湯屋にて、髪を洗ふことなども、最避けざるべからず。はた又、一家内に在りても、めいゝ自分ゝの髮道具などをチャンと一定して、他人のを一切使用せざることを最肝心なるべし。尙右に付き二月發行の衛生談話第二號には左の如く記せり。

或る専門技師の談によれば此疾病は羅甸語にてアロベチヤ、アレアター即ち邪語にて之れを翻譯すれば鬼抵頭といふに當り人間の毛髮即ち被髮部に發生するものなるが重に頭部に發生する者にて最初は一ヶ所に禿點を認め漸次周圍に向つて増大し暫時にして圓形若くは楕圓形の無毛環を形成しその周圍の毛髮は漸次懸疎となり直に脱落始む此の如くにして壹圓銀貨大となり各環聯合して樹葉狀を形成し最も性惡なるものいたりては全頭を犯すの外髯毛、腋毛、陰毛、眉毛、睫毛、その他あらゆる毛髮をして脱落せしむるに至る而も此

的等の悪性にいたりては極めて罕なり。萬一この疾病に罹れる婦人は容貌を貴ぶ婦女の天性として羞耻の極々自殺を企つるにいたる者あり併しながら一般に此疾病の豫後は決して不真にあらす毛髪は再生する者なり茲に一例を擧れば該患に罹り三十五年の後に至り一旦不治と認められしものも枯木の再び華咲くが如くに再生したるもあり、疾病の原因については二種の學說あり一は皮膚等の營養神經の疾患なりといひ此説に左袒するもの多し第二は植物性の寄生物に重きを置く人あり此第二の原因としては實際における流行をもつて論據とするものあり例へば近年佛國における或兵營中短時日において八十人の流行を認めたることあり又獨逸においても流行ありしことあり故に大阪におけるも或は所謂第二のものなるやも測られずこれ又或は第一の疾病流行しつゝあるやも知るべからず兎に角目下取調中なれば不日判明するの期あるべしといづれにせよ別段恐怖する程の病氣にあらざるは明かなり、又その療法の如きも相當に存在しあるを以て萬一該病に罹りたりと思惟せば醫師を迎へて治療を乞ふの必要あるは勿論なり、次に公衆衛生の取締としては第一流行の徑路とも認め得べき理髮店湯屋等入込の場所は、注意するの價值あるも別に取締を嚴重にするに及ばざるべし、又學校等に流行する際には校長その生徒を離隔する必要も起るならん云々。

## 順境の淑女と逆境の烈婦

親愛なる諸姉諸嬢、古來苦心慘憺たる逆境に處して遂に萬世に名をなせる幾多の烈婦は、平素常に諸姉諸嬢の模範として、面前に提示せらる。吾人は、實に逆境に在つては、諸姉諸嬢が奮つて、之等烈婦の行動を摸せられんことを望む。然れども、由來悲惨なる人世の逆境は、吾人の生涯に於て甚稀に起る所のもの國家も家庭も、此の如き烈婦を要することは、其場合まことに多からざるなり。

且又、いはゆる偉人烈婦と稱するもの、其逆境に處したる時に於て、始めて其行動天地を動かすに至れども、順境に於ては、まことに平和順良の淑女なり。蓋し順境に在りて細瑾苟しくもせざる君子淑女にして始めて逆境に於ける偉人烈婦となる。大功不願細瑾とは、屢々我東洋流の英雄偉人を凝する者の其意を誤りて、口にする所なりといへども、吾人は取らず。

教ふる諸姉、教を受くる諸嬢、偏に逆境に於ける烈婦の行動のみを見て、其順境に於ける淑女としての彼等の面影を忘れざらんことを希望するものなり。

### 趣味ある家庭

世界中、最家庭の趣味を樂ひは、獨逸國民に如くはなかるべし、社會の下層に位せる、言はゞ労働者、工夫の如きに付きて見るも、尙之を知り得べし。彼等が戸外に出で、労働するや、十二時より二時に至る間は、即ち晝食の休憩時にてあるなり。此時間に至るや妻は、其家よりはるく一家中の晝食を用意して肩にかけて、仕事場に來り、子供はカバンを肩にして、程近き學校より、此處に集り來り、かくして、其時間内に於て、父子夫婦兄弟、融然として團樂の間に、晝食を終る。彼處に五人、こゝに七人、所々、散點して、青空の下、野花の間、至る所、最自然なる、最愉快

なる、家庭的生活を樂みつゝあるを見ん、既にして二時の號鐘ひいき渡るや、妻君は、夫々辨當がらを片づけて、背に負ひ、子供らは、またカバンを肩にして、レーベンヤールなる語どもに、夫や父を工場に残して、家路と學校とに歸り行く。金殿玉樓珍珠美食に飽きて、しかも樂を家庭に、取ることを知らざる我邦人は、これに付きて、如何に感ずべきか。  
由來、獨逸人が、着々として事業に成效する所以のもの、一は其忍耐不屈の精神に依るといへども、この趣味ある、一片家庭の温情、又大に預つて力ありと云はざるべからず。

### 我が敵を愛せよ。

愛の極限は、遂に己の敵を愛するに至る。基督曰く、爾曹の敵を愛し爾曹を誼ふものを祝し、爾曹を憎む者をよくし、虐温迫害する者のために、祈禱せよと。是



れ、耶蘇教の本旨にして、又實に、愛の極限、人道の極致を顯せる格言なり。

今回、北清に於ける聯合軍の蠻行は、今や既に、世界に知らる。從來、基督教國を以て、自ら任じ、文明を以て、自ら誇りし、西洋列國は、北清事件に於て、遂に其眞想を世界に曝露せり。彼等は、もはや基督の名を捨てざるべからず。綿羊の姿を以て、虎狼の慾を逞しくするもの、試に其狂暴殘忍の一節を擧げんか。

無辜の人足どもに至るまで、一々捕縛せられて、無殘なる銃殺の刑に處せらる、こゝには父子相並んで虐殺せられ、彼處には夫婦相擁して慘殺せらる。血は混々として、街路を浸し、人家に至る處、死屍鮮血を以て汚さる。市民等は、右往左往に逃げまどうて銃砲の響、劍戟の光に戰慄し、眼前最恐るべき地獄の有様に遭遇せり云々。

安んぞ知らん、其古し、成吉斯皇帝の歐洲東部遠征の際、歐洲人等が蒙りたる慘話の二十世紀に於ける文明

絶頂の今日、こゝに彼等歐洲人に依りて、成吉斯の子孫に向つて再現せられんとは。吾人は、實に因果應報の免るべからざるを視ると同時に、彼等歐洲人がこの復讐的行為に依りて、永く世界史の上に、消ゆべからざる汚點を留めたるを悲しむものなり。

### 筆法は無用

説者あり曰く、習字を授くるに入釜敷筆法を教ふれども、素と筆法は人々個々の流義、云はれ各自の本體性質を顯はせる、僻なれば、人々の書風相異なるは、恰も其面の異なるが如し。萬人の本質を同一ならしむることは、到底不可能のことなり、從て世に正當の筆法といふものは、勿論不可存のことなり。王羲之といひ、顏真卿といひ、柳公權といひ、董其昌といひ、徽明といひ、子昂といひ、弘法といひ、道風といひ、海石といひ、菱湖といひ、何といひ、蚊といふも、各々自己流を以て書きしに外ならず、故に筆法は無用、今

の書を習ふもの、宜しく自己の流義を以て、自己の本質を顯はすが如くにして、始めて書を能くすべし。但し自己の意の適する所により、他の書法を參考に資するは、利ありて害なしと。此論極端に走るの嫌われども、一味の眞理を存するを見る。

筆のまに

(摩訶生寄)

植木屋

世に植木屋程愉快なる職業なかるべし、朝な夕なに春も夏も秋も冬も、長閑に自然を樂みてそれにて生計を營む、さても植木屋の樂さよ、されど植木屋が縁日に懸値をいふは甚だよろしからぬとなり、彼等は偽を平氣にて話すなり、賣價七十錢といふ植木の鉢を買客は唯五錢といふ、遂に七錢にて賣ると定まりぬ。買客も賢とや云はひ、買主も賢とやいはひ、さるにても、我は一種變な感じするなり、凡て市中の夜店は皆此類

にして之より一層横着なるものと心得て差支なし、目前の小利に眩み、人を誤魔化さんとする小商人の商略はど賤むべく憐むべきものはなし。

大道易者

黄昏の頃、街道の彼處此處に、算木筭竹をひねくりて人相、手の筋なぞと仔細ありげに人の吉凶禍福を説く、大膽なる無鐵砲の者共なり。凡そ人の心はど弱きものはなかるべし、己が智恵の及ばぬところは皆何と心の安め處を求むるものなり、さるにても大道易者に賃して己が心の迷ひを慰めむとする者の少からぬ中は社會は全くの文明開化に候はず。

街道蓄音機

大道易者と相對して盛に人を引寄するは本郷神田邊の蓄音機屋なり、下らぬ俗歌を聞かひ爲に人々の立止まるなり、をかしきは暫くしてバラ／＼と集へる人々の散ずるとなり、そは愈價を拂うて聞くべき時とされる故なり、更にかしきは蓄音機屋が聴衆に「逃げな

くどもよい」といふとなり。彼も是も揃ひも揃ひしものなりと、徐歩の歸りの友の話なりき。

物貰ひ

人の道義心といふ弱點を狙らひて、竊かに他の者より瘠せ細りたる幼児を借り來りて蓬頭亂髮相並びて、「ドーン憐なものに御情けを」と訴ふるところ、乞食も中々づう／＼しきものなり、淺草邊此類頗る多し、されど彼等の哀訴する聲の一定のリズムを以て歌ふが如く響くは、争はれぬ其本音を吐けるなり、げに蔽ふに蔽はれぬは人の内心の眞の實際の處なり。人の苦みを見て憐を催して恵むは人の人たる品高き處なり、されど哀訴の事情を考へずに妄に施與するは却て慈善の本旨にもとるとあり。

盲の笛吹

月の夜に未だ春風の暖かならぬに街道の小暗き片隅にて吹き鳴らす尺八の吹手は争はれぬ盲の人なり、盲は手を出して求めぬなり、聲出して行く人に訴へぬなり、

されど夜ふけて恵む人なくば悲しさは自から其笛の音に表れて訴ふるとあらむ、兎も角も彼は唯吹くのみなり、行き交ふ人も立ち止まりて耳そばだつるなり、唯聴くのみなり、盲の爲に恵む人は殆んどなきなり。促されず、迫られず、直接に哀訴せられずば、眞に憐むべきを感じながらも施し恵まぬは常人の心なり。



●東宮妃御慶事 東宮妃殿下には、既に先般青山御所にて、御着帶式を行はせられたるが、御分婉の御慶事は、多分本月下旬ごろなりと泄れ承たまはる。御命名のおん式は、御降誕後七日目に行はせられ、夫より四十三日目に、初御参内ありて、兩陛下に御對顔あらせ

られ、賢所の御参拜あらせらるべき次第にして、御着替式、御名式、初御参内を以て、御産所御三祝と稱し奉る由なり。

●伏見宮家の御慶事 過般、侯爵山内豊景氏へ、御降嫁の勅許を、得させたまひたる伏見宮禎子女王殿下には、愈本月六日を以て、山内家に御降嫁あらせらるべき由にて、當日、山内家に入らせらるゝ迄諸事皇族の御取扱ある由にて、紀尾井坂伏見宮御本邸より、麴町七丁目山内侯爵邸御入輿の際は、儀仗兵半小隊を附せらるゝやに承はる尙同殿下には極めて、御快活なる御性質にて、諸事に御堪能なるが中にも、別して、美術上の御意匠の御巧妙なるには、屢御附人を感歎せしめらるゝ程なりとのおんことなり。

●女子大學校 小石川區高田豊川町に於ける同校は、愈々本月廿日を以て開校式舉行の由なるが、志願者は國文學部に最多くして、七十人を以て、一學級を編制するの已むを得ざる程なるが英文學部は、割合に少

數にして、尙定員に充つるに至らずと、尙同校には、二百人餘を容るゝに足るべき、寄宿舎もありて、寄宿舎の改善は、同校の、最意を用ふる所なりと云ふ。

●女子高等師範學校卒業生送別會 同校今回の卒業生徒數は、本科四十四名、國語漢文專修科三十九名にして、先月廿八日午後三時より、同校生徒は、卒業生のために、盛大なる送別會を催うし、餘興として、運動奏樂、唱歌、狂言等ありて、中々の盛會なりき。

●同卒業式 同校卒業式は、先月卅日左の順序により同校講堂に於て舉行せられたり。因に記す。附屬高等女學校卒業生は七十四名、同補習科卒業生十七名なりと。

午前九時三十分

着席

一唱歌

皇后陛下御歌「みが、すば」

(總員起立)

「たもへばはてなき」

二卒業證書授與

本校本科卒業證書授與

本校國語漢文專修科卒業證書授與

附屬高等女學校補習科卒業證書授與

附屬高等女學校卒業證書授與

### 三校長告辭

### 四文部大臣祝辭

### 五生徒謝辭

本校本科卒業生總代

本校國語漢文科專修科卒業生總代

附屬高等女學校補習科卒業生總代

附屬高等女學校卒業生總代

### 六唱歌 「はてしなき」

以上

●有害色素含有の玩具 警視廳にて先般來左の玩具に就き、其色素分析試験中なりしが、何れも一昨日有害色素を含有するものと認められ、所轄警察署に通牒して、相當處分に附せられたり。

- 一、笛付招猫、南足立郡千住町中組七十三番地今井三十郎方販賣にして、赤色は酸化鉛、黄色は硫

化砒素、綠色は亞砒銅含有せり。

- 一、土製鳩笛 同郡千住三丁目十一番地布施龜藏方販賣にして、赤色酸化鉛、黄色及綠色は硫化砒素含有せり

- 一、紐付鞠 荏原郡羽田村大字羽田千七百七十五番地

出川榮吉方販賣にして、赤色は、鉛丹含有せり。

- 一、紙製鉛賣人形、南葛飾郡龜戸町十四番地水谷

某の製造に係り、黄色は硫化砒素、赤色は鉛丹含有せり。

●漢字の削減 帝國教育會。國字改良部に於ては、漢字大削減の方針にて大體左の方法によりて、調査さるゝことゝなれり。

一、假名でわかる言葉は漢字を用ゐぬ事、(イ)わが國音の動詞、形容詞、助動詞、副詞、感嘆詞、後置詞等、(ロ)固有名詞、(ハ)普通の外國語、本邦語にて、通常使用し居る各種の名詞、(ホ)其の他等にして、此のうちには、總ての名詞及び

ハヤリ(流行)等の言葉をも含ひ、

二、字畫が多くしてかくに手間をれ、覺えるにむつ

かしい漢字を用いぬこと、

三、字畫が、少なくとも、間違ひ易い漢字は用いぬ

こと、

四、假名でかくよりは、便利な漢字は、用いること

五、略字のあるものは、すべて、略字を用いること

圓、錢、厘、亂、當、白等、

この方法によるときは、文部省の千二百餘字の漢字よ

り尙七百餘字を減ずることとなり、即ち、僅に五百餘字

を以て満足することゝなるべし。

●言文一致會の文例 辻新次、前島密、高津鐵三郎、

後藤牧太、湯本武比古、山縣悌三郎、白鳥庫吉、三輪

田眞佐子、廣瀬竹子等の諸氏よりなれる同會にては、

過日、白鳥文學博士より出したる作文課題につき、各

會員の起草したるもの、中より二三を擇びて、添削し

次の如き文例を得たりとなり。

梅見に人を誘ふ文

三輪田眞佐子

御近くながら、御無沙汰がらで、誠に、申譯がありません、丁度、此頃、梅が盛りでしやうから次の日曜日、大森から蒲田へかけて、御伴致し、途すがら、久しぶりに、四方山の睦語をいたしたら、どの位愉快かと、ぞんじます、御都合は、如何でしやうか、若し雨天でしたら、宅の梅を御覽になり、茶でもあげたうおもひます、御口上でよろしいから、御返事を願ます、書外は梅の本でと、樂しみ居ますかしこ、

悔みの文

同

只今、御手紙で、御父上様の、御死去を承りました、誠に、驚き入りて、申あげやうも御ざりません、殊に暫くの御病氣でありましたと、猶更御残念と御察し申します、先頃、御出京遊されて御立寄りされた、昔の友も、今は少くなりましたなど、彼是、世上の御話もなされたが、やがて御父上様御自身が、彼の世の友を追ひて、御かくれなさいましたと、おもへばいよく、人生は朝露のたとへに、洩れませぬを、感じます、今日は、何だか夢路を歩む、心地がしますから、ま、取敢へず、御悔のみ申上げます、かしこ、

同上

高津 鐵三郎

今朝御手紙を拜見いたして私方でも一同に驚き入りました御病氣の事は、わけて承て居りましたが、おひく時候もよくなりましたから、はや御全快にもならふかと存じて居りましたところ御亡くなりなつたといふ御しらせで誠に残念に思ひますましてあなた様にはさぞ御残念の事と御察し申します、かしこ、御生前に残る方なく御孝養を御

盡くしになりました。また御病中も充分に御手を盡くしになりました。から生者必滅の習ひと御諦めになるより外はありますまい。あまり御嘆きになつて御からだにさはるやうなことがあつては御亡くなりになつた御母上に對しても却て御不孝になるかと存じます。とりあへず御悔み申上げます。

梅見に人を誘ふ文

三矢 重松

相變らず御忙しいこと、は思ひますが一日の閑を作りかゝれるあなたではありますまい。久しぶりに例の仲間、で今度の日曜に梅見をしようといふこと、です。處はちと當前ですが、汽車の便利の爲水戸と極りました。花の外に得ることもありません。増税案の様な目にはあはせて下さいます。

梅の文

同人

……様御病氣の處遂に御なくなりになりました。さうで誠に御愁傷御察し申します。かゝれて御大患とは承りましたが、やうなことは思ひませず。つひ御見舞もいたしません。で御申譯もございませぬ。くれぐれも御残念の事、でございしました。別券香奠は甚累儀でございしますが御靈前に御そなへ願ひます。取りあへず御悔まで。

●女子高等師範學校附屬小學校の國語調査案。

同校

に於ては、過般來、小學校に於て使用せしむる國語使用法に於て、調査中なりしが、このほを同調査委員に於て決議したる要項を同校長に向つて報告に及びたれば、同校に於いては、この決議案に基づきて、更

に研究調査せしむる筈なりといふ。今、其要項といふを聞くに、大體左の如くなりとのことなり。

### 國語調査案

#### 第一言 語

#### 一 言語の標準

東京に行ける、中等社會の言語(主として本校教師常用の語)但しその冗長なるは成るべく之を省略すべし

#### 第二假 字

#### 二 假字に對する意見

假字は到底一樣なるべし一樣ならざるべからずといへども片假字を廢すべきか草假字を廢すべきか將又兩者とも之を廢し別之を定むるかは本調査會の權限外なれば暫時從來のまゝ兩者を採用することになりぬ

#### 三 片假字

その不用なるは之を除き連音表によりて排列すれば左の如し

- アイウエオ
- カキクケコ
- サシスセソ
- タチツテト
- ナニヌ子ノ
- ハヒフヘホ
- マミムメモ
- ヤイユエヨ……………(文法上イ、エ、ヲ書き加フ)

ラリルレロ

ア

ン

### 四 草假字

その不用なるは之を除きいろは歌の順序に従ひて之を排列すれば左の如し

いろはにほへとちりぬるわかよたれそつねからむうのおく  
やまけふこえてあききゆめみしひもせすん

### 五 濁音半濁音

從來の通りなるべし即左の如し

ガギクケゴ	がぎくげこ
ザジズゼヅ	ざじずぜぞ
ダヂヅヅド	だぢづでど
バビブベボ	ばびぶべぼ
パピプペポ	ぱぴぷぺぽ

### 六 促音符

その原音の如何に關せずすべてッ、つを以て之を表はす  
但しその書き方は本文より稍(活字にて凡一號位)小さくしそ  
の右側に之をおく

學校 ガッコー 鐵砲 テッポー

### 七 拗音符

その書き方促音符に同じ

キユ シユ チャ チョ

拗音と促音と續き來りし場合にはその書き方を左の如くす

### 八 疊音符

暫時チヨット出奔シユッホ

疊音符にはすべて「」を用ふ

但し復疊音符の時には「く」「く」「く」と續け書す

シ(獅子)スト(煤)……………(清音の單疊音符)

ザ(祖父)バ(祖母)……………(濁音の單疊音符)

コヅ(小包)ゴザ(小笹)……………

……………(前音のみ濁音なる單疊音符)

カガミ(鏡)スズメ(雀)……………(後音のみ濁音なる單疊音符)

イヨ(彌)ツラ(熟)……………

……………(清音の復疊音符)

グズ(遅)ゲツ(蝸)……………

……………(濁音の復疊音符)

ジバ(塵)ハカ(抄)シ(抄々)パン(パン)爆(爆々)

ゴロ(羅)ハ(懶)タ(懶々)ボチ(ボチ)……………(點々)

……………(清濁混、清の復疊音符)

四音以上及音のみ疊なりて品調の異なる場合には疊音符を用ふべからず即ち

なにとぞ(何卒何卒)

むさしのつき(武藏野の月)

さお(竿)……………(竿を折る)

とせすして

なにとぞなにとぞ

むさしのつき



まわおる

とすべし

九 長音符

長音符は「ー」以て之を表はし「すぢ」と呼ぶ

第三 國音假字遣

一〇 名詞

(一) 連音表に於てキ、エ、チ、の三字減じなければ従てこの

三字を用ふべき名詞なし故に

菘、豕、井、鳥居、藍、基、

等の如く従來キを用ひ來れるはすべて

イ、イ、イド、トリイ、アイ、モトイ

とし

繪 餌 杖 机 聲 末

等の如くエを用ひ來れるはすべて

エ、エ、ツエ、ツクエ、コエ、スエ、

とし

叔父 羽織 長男 斧 女

等の如きチを用ひ來れるはすべて

オチ、ハオリ、オサ、オトコ、オノ、オンナ

とするが如し

(二) 音便の上より來る轉音は凡て音便のまゝ之を表はす

冠 箒 蠅 弟 申ス 詣テ

は直に

カンムリ、ホーキ、コーモリ、オトート、モース、モ

ーテ

とするが如し

(一) 「ひ」の「い」にきこゆるはすべし「ぢ」とす

間 蠶等の如し

(二) 「へ」の「え」にきこゆるはすべし「え」とす

家 蠅

(三) 「ほ」の「お」にきこゆるはすべし「せ」とす

顔 鹽

(四) 「じ」の「ち」はすべて「ち」とすべし即

主人 蛆 蠅 蝨 蛆 諺 虹

等の如く従來じを用ひ來れるは

アルゲ、ウゲ、シゲミ、ナゲル、ニゲ

とす

但連聲によりて濁音となりしは原音によるべし

川尻 牝鹿 黄縞

とせずして

カワジリ、メジカ、キシマ

とするが如し

(五) 「ず」「づ」はすべて「づ」とすべし即

疵 鼠 蚯蚓 硯

等の如く従來「ず」を用ひ來れるはすべて

キツ、ネツミ、ミーツ、スツリ

とす

但し連聲によりて濁音となれるは原音によるべし

卵 蝸 食 物 數 奇 小 砂

卵 蝸 食

とせすして

タマゴズシ、モノズキ、コズナ

とするが如し

(未完)

●陸奥深浦の福田會 同福田會は、明治卅一年三月、深浦寶泉寺内に開きたるものにして、爾來多少の變遷を経て、目下、千崎如幻氏一人にて擔當益盛大に赴きつゝあり、同氏は熱心なる佛徒にして、同地に於ける幼児子守等の如何にも無教育に陥れるを慨し獨力にてこの會を組織し時には自から保母となり時には教師となり時には母の友となり唱歌裁縫讀書算術地理歴史等を教授して日夕倦む所なし。而も、全村貧民多きを以て、其要する所の費用の如きも一の寄附なく皆自支出してこれに充つるものなりといふ同會の事業は左の諸部に分たる。

學	部	庭	家
福田會	福田會	幼兒のつどひ	母のつどひ
學童	少年のつどひ	毎週月火水木金土午前	毎週月火水木金土午前
少女のつどひ	毎土曜夜間	毎日曜午前	毎日曜午前

部	行	施	部	燈	幻	部	書	圖	部	園		
法	財	施	臨時會	他村幻燈會	家庭幻燈會	公會	學園	讀書のつどひ	圖書法施	子守福田會	婦人福田會	青年福田會
形名刺。	佛像。經卷。書牘。印刷物。花	品。病床慰問品。品。幼兒玩具。兒女裝飾	寺院に法會あるとき忌申通夜のこと、大祭日佛祖忌のとき、其他時に臨みて	近傍の村落を巡回す	特に一族のために開くことあとべし	全村を七區に分ちて七ヶ所にひらく	學園部のために開く	圖書室にて來賓に閱覽せしむ	宗教書類を貸與閱覽せしむ			
不定日	不定日	不定日	不定日	二春 回秋	不定日	一每 回月	每 日 曜 日	每 每 日 夜	不 定 日	午 後 午 前	每 日 曜 午 後	每 月 曜 夜 間

# 海外彙報

## 英國幼稚園の状況（承前）

### 安井 てつ

此理由に依りて、チエルタナムの學校にて、二種の保姆養成所があります。即子供を保育する技術のみに長じて、保姆の下働となる者を養成すると、技術のみならず、保育の原理を了解する保姆を養成する所の二つありて、

甲は家内遊戯法、保育の大意、兒童衣服の裁縫思物取扱等技術的の事を教へ、一年間にて卒業で、乙は宗教、心理學、教育學、倫理學、生理衛生、動物、化學、幾何學、圖畫、體操學の學科を教へて、七學期即二年と一學期學んで資格を得ます。又女史の考によるときは、保育の目的も亦幼稚科及幼

海外彙報 英國幼稚園の状況

稚學校と幼稚園とで違はねばならぬ。即幼稚學校に來る者は貧民の子供であつて、其多くは將來勞働社會に屬するのであるから、是等の者に向つて直接の利益となるのは

第一、目及手の練習である、例は紙を剪り、織紙をするにも正しく精密にするといふ習慣をつける事が必要である。

第二、是等の子供の父兄は教育もなく、家庭も亂れて居ります。故に遊戯とか、唱歌などで朋友と共に樂しみ、一致親愛の精神を養ふ事は必要である。

然るに幼稚園に來る子供等は、將來從事する所の仕事が進む。即幼稚科に來る様な子供を支配するものになるのであるから、其方針が違つて來ねばならぬ。それで女史の幼稚園の眞の方針を説いて云ふに、

第一、知力、徳力を體力と併行して、今一層徐々に發達せしめ、各兒の心力發達に相當をせねばな

らぬ。即甲は甲の心力發達に應じ、乙は乙に應じた保育法でなければならぬ。

これを詳に云ふときは、

(1) 子供は「或る者」である様にせねばならぬ。即甲の子供は甲たるべき特殊の品性を持つたものでなければならぬ。

(2) 子供は「或る事」をして居らねばならぬ。例ば何か仕事をするには其者が或る事をして居らねばならぬ。子供の仕事は何か蒸溜の力に依りて機械が動く様なものではありませぬ。彼積木をするにも機械的にするにあらずして、子供の意志を用ひて机ならば机、門ならば門を造らうと云ふ考でやつて居るのでなければならぬ。

(3) 子供は「或る物を知らねばならぬ」即袋に多くの物をつぎ込むが如くに智識を唯子供の腦中に注ぎ込まんとする事は大きな間違ひで、子供自ら知らうと思つて居るものを自ら求めて知

るものでなければならぬ。かゝる三の目的で一人々々の子供を一個人として發育をさせねばならぬ。

第二、知、情、意、の三がよく調和して發達する様に保育法を案出せねばならぬ。

例ば遊戯に付て申さば、其目的は固より、體育にありませぬが、其上に共に樂しむといふ一致和合の徳を養ふ事が出来る、唱歌も亦其通りで御座ります。

又智識の點から言へば、種々恩物を與ふる上に或は幼兒の注意力を養ふとか、或は思想を適當に表出する力を養ふとか、夫々の目的に應じて、これを課さねばならませぬ。

第三、は幼稚園に入る子供は實にあたゝかき善良なる空氣に觸るゝ感じがせねばならぬ。

幼稚園の保母は善人でなければならぬと云つた人があります通り、其處に來る子供は其人の愛

の感化で自然に楽しく、愉快な感情が起る様でなければならぬ。

第四、は子供をして團體の一部と云ふ考を持たざればなりません。これは第一と衝突する様に思はれますが、能く考ふるときは、決してそうでは御座りません。即心力とか身體とかいふものは各兒銘々特別の發達を圖らねばなりません。共、他方に於て多くの友達と遊戯する間に自然其團體の一部と云ふ感情を養成し我儘を制すといふ習慣をつけねばならぬのです。

第五、は子供は想像力に富んで居るもの故に其有様に注意して。これを利用せねばならぬ。例ば幼兒の書く繪畫によりて、其心力活動の有様を知る事が出来た。又これを利用して種々の面白き遊びをする事が出来た。英國の幼兒は種々の話を所作にあらはして友達と共に演ずる事を面白がり。例ば一人は鳥となり、

人は子供となり、一人は鐵砲となりて、種々問答もし、所作もして遊ぶのです。保母たる者が絶えず子供の想像力活動の有様に注意し、これを利用する時は、保育上種々の面白い發明が出来ませう。

以上の如く仕事に堪へるものは、本當に保母の資格ある者で、心理學の智識は能く了解せられ、且生理衛生の思想もなければなりません。かゝる人は即世に所謂自稱保母なるものとはよほど保育上に目の着け處が違つて居る筈であるとは、ウエルトン女史の説で御座ります。概して英國の幼稚園は其教ゆる方法は兎もあれ、一般に智育に偏して居る様に思はれます。今幼稚園の一の組と小學校の一二年生とのする仕事を御覽に入れませう。

年齢	幼稚園
五歳乃至七歳	小學科一二年
授業時間	七歳乃至九歳
午前九時半より十二時半	九時より十二時十五分

科目

(1) 祈禱及聖書の話

(2) 數え方

(3) 読み方

(4) 小中食 (パン又はビスケット及牛乳の類) 休息

(5) 遊戯、運動又は唱歌

(6) 書方又は畫方

(7) 庶物話又は地理上の話

(8) 諸種の恩物

(9) 退校前の唱歌

以上を比べますと、能く似て居る事に氣が付きませう。又故さらに連絡が付いてあるのです。併其差違の大體を申せば、

幼稚園の保育法は小學校の一年生よりは

(1) 祈禱及聖書の話

(2) 數へ方

(3) 讀方、話方、文法、

(4) 歴史又は地理の話、又は詩歌誦讀、

(5) 小中食、休息、唱歌又は體操、

(6) 習字又は圖畫、

(7) 天然物、形體上に關する實物教授、

(8) 手藝、縫方、籠細工、粘土及紙細工等

(9) 定庭の仕事(一時間)

一層具體的で、

一層變化が多く、

遊戯、手藝に多くの時間を與へ、

各課業の時間短くて、二十五分以上に渡ること殆なし。

幼稚園の子供の中には、「ピアノ」を習ひ、佛蘭西語

を習ふものなどがありまして、我邦の様子とはよほど

ちがつて居りますが、私共の目には少し教へ過ぎる様

に見えます。私は

此疑問を度々園長などにしたことが御座ります

が、幾分か教へぬと母親が不平なるゆゑ、餘儀なくす

るのだと云ふた人も御座りますが、其幼稚園の比較的

に振はぬ事も亦家庭がよいのと、母親に教育もあり、又家庭教師のいゝのを幾何でも得らるゝ便宜があるのも其一原因であらうと存じます。餘り長くなりましたからこれで止めますが細い事の御質問はいつでも承ります。(おはり)

# 新刊雜誌

書名

女子の友 第八拾六號

をんな 第二號

女學雜誌 第五百拾三號

女鑑 第二百三拾三、四、五號

慶應義塾學報 第三拾七號

教育時論 第五七一、二、三、四號

岐阜縣教育會雜誌 第七拾七號

山形教育雜誌 第九拾六號

越佐教育雜誌 第九拾八號

長崎縣教育雜誌 第四百四號

信濃教育會雜誌 第七拾七號

愛知教育雜誌 第六拾七號

福井縣教育會雜誌 第四拾四號

神奈川縣教育會雜誌 第九拾八號

よもぎがしま 第九拾九號

私立兵庫縣教育會雜誌 第三百三拾八號

下野教育 第七拾四號

德島縣師範學校附屬小學校通信雜誌 第二號

上野教育會雜誌 第六拾一號

福島教育 第七拾一號

會報

發行所

東洋社

大日本女學會

女學雜誌社

國光社

慶應義塾社

開發社

同教育會事務所

山形教育社

越佐教育雜誌社

教育會

信濃教育會事務所

愛知教育會事務所

福井縣教育會事務所

神奈川縣教育會事務所

名古屋片野東四郎

同會事務所

下野教育會事務所

上野教育會事務所

福島教育會

三重縣私立教育會雜誌 第二拾九號

彰善會誌 第三拾六號

衛生談話 第二號

東京市教育會時報 第六號

教育實驗界 第七卷第四、五號

婦女新聞

私立兵庫縣教育會雜誌 第四百廿九號

山陰之教育 第七拾號

克己 第四號

哲學雜誌 第六拾八、九號

通俗佛敎 第五號

德島縣師範學校附屬小學校通信雜誌 第三號

長崎慈善月報 第二號

慈善新報 第二百廿九號

評釋界 第一期第二號

教育文庫 第二號

同會事務所

彰善會

通俗衛生茶話會

東京市教育會事務所

育成會

婦女新聞社

明輝社

鳥取縣教育會事務所

鳥取市東町同發行所

同雜誌社

光融館

長崎慈善會

大阪慈善新報社

四海堂

帝國通信講習會



明治三十四年三月十五日午後二時半女子高等師範學校附屬幼稚園に於て幹事會を開く

決議せしこと左の如し

一、四月二十一日午後一時女子高等師範學校附屬幼稚園に於て第六總會を開くことに付ての件々

### 會告

拜啓來廿一日午後一時女子高等師範學校附屬幼稚園に於て左の順序により第六總會相開き候間御知友御誘引御出席相なりたく此段御通知申上候也

#### 順序

- 一、開會
- 二、會務報告
- 三、幹事改選
- 四、休憩此間成績品參考品雜覽
- 五、演説及實驗談
- 六、音樂
- 七、隨意談話及遊嬉
- 八、唱歌

追て當日展覽に供すべき保育上の參考品成績品等はなるべく多數御出品下されたく且つ御出品は開會當日二日前に着致し候様に御發送相なり候様致したく此段御依頼申上候

明治三十四年四月

フレール會

### 入會

#### 東京ノ部

安東 よれ	女子高等師範學校	高橋忠次郎
森 乙女		木原 いと
永田 かい	同	篠原 しづ
藤澤 卓月		

#### 地方ノ部

里村 なほ	熊本市尙綱女學校	清家みしゑ	
田 中 梅		野原 つれ	
上野 かく		山岡 てる	
森田 きく	廣島縣師範學校	田坂 りつ	
中島 よし	同	高羽 ふみ	
田井畝三郎	新潟市高等女學校	赤穂 千春	
矢野 そう	和歌山縣師範學校	安野 ちち	
關 しん	宮城縣高等女學校	中村 しげ	
堺 さき	靜岡高等女學校	江藤 美保	
長野縣小縣高等女學校	栃木縣師範學校	佐原 眞	
三重縣津高等女學校	安達 けい	群馬縣高等女學校	鳥海じゆん
京都府高等女學校	恒川 三枝	網佐賀縣高等女學校	阿部 つる



女子高等師範學校講師岡田起作先生編并書

# 女子書翰文

文部省檢定濟  
 上卷正價金貳拾五錢 下卷正價金貳拾八錢 郵稅各金四錢宛

# 女子習字帖

全四册

發兌元  
 一卷金拾錢 二卷金拾壹錢 郵稅各金貳錢宛  
 三卷金拾貳錢 四卷金拾五錢  
 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地

# 烏丸帖

全二册

上卷金拾八錢 下卷金貳拾錢 郵稅各金四錢宛

# 古今和歌集序

新刊

定價金貳拾五錢 郵稅金貳錢  
 金昌堂

女子高等師範學校  
 教授理學士 平田敏雄校閱  
 大阪第一高等女學校教諭 小島松之助編述

一女子理科

化學礦物の部  
 圖四十個入菊版美製本  
 定價五拾錢

同  
 一女子理科

物理學の部  
 圖九十七個入菊版美製本  
 定價六拾錢

右は高等女學校女子師範學校及之と同程度の學校にて各一學年毎週二時間の授業に適用せんが爲に編述したるものにして此教科に關する日常近切の事實及應用を成るべく簡明に説き且圖畫をも多く加へ了解し易からしめんと努めたるものなり  
 幸に御高覽の榮を給はらんことを偏に希上げ候

發兌

東京市日本橋區本石町三丁目  
 大阪市東區備後町四丁目

金昌堂

此廣告依御注文の方婦人子供を見たる旨御附記を乞ふ

# 文部省檢定濟

## 高等女學校用教科書廣告

新保馨次著

子女日本讀本

全八冊  
定價金壹圓五拾錢

寺尾捨次郎  
有坂幾造 共編

子女算術教科書

全二冊  
定價金壹圓四拾五錢

山崎勇編

子女幾何學大意

全一冊  
定價金參拾八錢

寺尾捨次郎  
能勢賴俊 共編

子女理科教科書

全二冊  
定價金七拾三錢

荒木寬敏編

毛筆繪手本

全六冊  
定價金壹圓六拾五錢

塚本瀧子著

家事教本

全一冊  
定價金七拾五錢

(後付の二)

發行所 東京區本町三丁目橋本

所賣 東京區本町三丁目橋本

金港堂書籍株式會社  
昌堂



澳國グラーツ府大學教授ドクトルブラウスニツ先生原著  
日本京都帝國大學醫科大學教授醫學博士坪井次郎先生譯補

# 衛生細録

全四册

各册正價金九拾錢  
各册郵税金六錢

(後付の四)

## 卷之一

●總論 ●么微有機體 ●糸狀微菌 ●芽性微菌 ●分裂微菌 ●菌蟲及び原蟲 ●微菌學試驗法 ●空氣 ●化學的  
成分 ●理學的性狀 ●天氣及び氣候 ●熱帶地方衛生

## 卷之二

●衣服 ●沐浴 ●土地 ●理學的性狀 ●化學的作用 ●給水法 ●水 ●人造鑛泉 ●傳染病發生及び其蔓延と給水  
法との關係 ●給水法良否鑑定 ●水の滅菌法に要する器械 ●住居 ●市街 ●家屋建築 ●新築家屋移轉 ●住  
屋監督法 ●煖室法 ●局處煖室法 ●中央煖室法

## 卷之三

●換氣法 ●自然換氣法 ●人為換氣法 ●採光法 ●日光 ●人為採光法 ●廢棄物 ●葬法 ●病院 ●學校衛生法  
●營養 ●食品 ●嗜好品 ●飲酒濫用の害 ●食器 ●傳染病 ●發生及び蔓延 ●免疫及び血清療法 ●傳染病防  
禦法 ●結核病 ●麻泣里亞病 ●實布の里病 ●亞細亞虎列刺病 ●腸室扶斯 ●歐羅巴虎列刺 ●小兒虎列刺 ●  
痘瘡 ●狂犬病 ●流行性感胃 ●梅毒及び淋疾 ●癩病 ●脚氣 ●黑死病 ●回歸熱 ●赤痢 ●工業衛生法

## 卷之四

此書は會て坪井先生が獨逸國ミュンヘン府大學衛生學の泰斗ベツテンコーフェル先生の門に在るの時深交あり  
しブラウスニツ教授の著なり、先生公務の餘暇翻譯に従事せられ旁ら本邦固有の衛生法及び先生が積年醫科  
大學及び獨逸國に於て實驗せられたる所の自説を加へられたり而して書中載する所は微菌學及び衛生學の要領  
を網羅し立論高尚にして所說精確一點の間然すべきなし第一卷第二卷及び第三卷既に公世し第四卷の如きも亦  
發行近きにあらんと乞ふ江湖の諸賢速かに一本を購ひ平素の渴望を醫せられんとす

東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地(電話本局九百五十八番)

發 兌 元

金 昌 堂 書 店



關根正直先生校閱

杉山文悟君 杉山俊之助君 共編

増訂二版  
**國史通釋**

全一冊 定價金四拾錢 郵税金四錢

本書は日本歴史を修むる者殊に之が檢定試験受験及斯道の獨習者の便に供せんが爲めに編纂したるものにして各項に收めし事柄は左の如し

(一) 人名(又は) 古來歴史上に顯はるゝ人名(又は) 神名(又は) 列舉し正確の讀書を示し其事跡を摘記す

(二) 地名 古戰場及城柵を擧げ其所在地を示し且歴史上如何なる事のありしかを記す其他歴史上に關係ある地名

(三) 政治法律 官職、位階、俸祿、貨幣、其他諸制度法令等を擧ぐ

(四) 風俗 家屋、飲食衣服及冠婚葬祭に關する事項其他種々の遊戯

(五) 學問 古來著名の書籍の解題、藩學、私學及現時の諸學校の起原沿革

(六) 美術工藝 繪畫、彫刻に關する事項、織物、染物、樂器其他廣く美術工藝に關する事項

(七) 宗教 神社、佛堂、宗教の諸宗派、宗教上の祭禮等

(八) 雜 前七項の何れとも定め難きもの及其何れにも屬せざるものを擧ぐ

以て本書が如何に必要有益の書なるかを知らしむ一本を備へて其の眞價を試みられよ

發兌

金昌堂

杉山辰之助  
(電話本局九百五十八番)

東京市日本橋區本石町三丁目

東宮侍講本居豐顯先生題詠  
國學院講師逸見伸三郎先生校閱

國語研究組合編纂

簡易  
**日本小文典**

全一冊 定價金參拾錢郵税金四錢

本書極メテ教育的ニ 文法及假字遣等ハ初歩ヲ記述シ其例題及練習題ハ總テ小中學讀本、又ハ修身、地理、歴史、理科等ヨリ採擇シテ初學ノ了解ニ便ニシ、尙新定字音假名遣ヲモ添へ、タレバ、尋常、小學、中學校、高等女學校、生徒用、高等小學校、國語教授用ニ適切ナルハ勿論、師範學校、入學者ノ自修用トシテ亦極メテ適切ナリ。

東京市本郷區森川町一番地

發行所 帝國通信講習會  
大賣捌所 金昌堂

此廣告に依り御注の文は方婦と人の子供を見たり行脚附を記ふ

世の教員  
父兄諸君  
幸に愛兒

# 教育童話

の爲に紹  
介の勞を  
取られよ

本書は小學校賞與品及び家庭の讀本に最も適當せり

第三篇

## 教育童話 菅丞相

附 丑 話

丑の三十四年  
一月發賣  
定價金八錢  
郵稅金貳錢

東は奥州の果より西は筑紫の極みに至るまで、一縣一郡の間天満天神の社なきはなし、天満天神とは何ぞ、即ち菅丞相道真公これなり、道真公は延喜の朝に仕へて治績休明、勳功顯赫たりしことは人の略ぼ知る所なり、ことに其人品高く學術深く、千有餘年の後に至るまで、教師學童の爲めに尊敬せられ、その像を掲げて、戸々これを祭り、家々これを祀らざるはなし、此の如きに至る所多し、其書を見るに至れば、誠にして喜ぶべき事共なり、然れども其書たるや大方君子の覽に供するもの、みにして兒童の爲めにするもの少なし、多稼散人つねに之を懐にし、こゝに筆を執て菅公の傳を起し、文章極めて平易に、兒童走卒をして一讀了解し易からしめ、且つ畫工をして毎頁圖畫を挿し、こゝに菅公の爲りて、自から感奮興起の心を發せしむ、ことに明治三十四年は菅公の一千九百零一年祭を行ふの事あり、公の事を研究するものは是より益々多からん、この際菅公の何人なるやを人に問はれて知らずといはば、耻孰れかこれより大なるものあらん、速かに一本を座右に備へて公の人と爲りを知れ、牛の語あり、短篇のお伽話にして、無邪氣なる所兒童の讀むに任せて亦一興

### 教育 童話

第一編 第二編 第四編

大黒天 大黒天 大黒天  
大黒天 大黒天 大黒天  
大黒天 大黒天 大黒天

近刊

定價金八錢 郵稅金貳錢  
定價金八錢 郵稅金貳錢  
定價金八錢 郵稅金貳錢  
定價金八錢 郵稅金貳錢

金昌堂

町石本區橋本日  
地番三十二目丁三

肆書行發

(後付の七)





●高等小學理科教授用として何れの教科書を用ふる場合にも當て嵌るものは左の動物圖植物圖に優る者なし

矢澤米三郎君校 帝國通信講習會編

理科教授用動物植物圖

動物圖	第一級	縱幅二尺六寸	本圖ハ犬猫牛馬鷄禁止鳥鴨鵝蛙	定價	金壹圓五拾錢
植物圖	第一級	縱幅二尺六寸	本圖ハ梅櫻堇蒲公英麥豌豆松	定價	金壹圓五拾錢
動物圖	第二級	縱幅二尺六寸	蛇鯉鯛ノ類十葉ニテ	定價	金拾錢
植物圖	第二級	縱幅二尺六寸	百合胡瓜栗等ノ十葉ニテ	定價	金拾錢

生理圖近刊

●本圖は動物植物の特質を容易に觀察し得べき様描寫して美麗の彩色を施し五六間を隔つるも明に其要點を認め得る様注意したる者なれば理科教授用として最適切なり

●今や新學年に際し本圖の入用尤も切なるものありと認め多數調製したれば請ふ續々愛顧の榮を賜はらんことを

矢澤米三郎先生撰 植物圖第二級出來

發行所

東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地

金昌堂

矢澤米三郎 河野齡藏合著

# 普通理科教科書

理化學及礦物之部  
全壹册

定價四拾錢 郵稅六錢

右は講習用檢定受驗用高等女學校用として編纂したるものにして文章を平易簡明にし、挿畫八拾餘を入れて理解に便ならしめられたれば獨修者にも極めて便なり。

發行所 東京市本郷區 森川町一番地 帝國通信講習會 町三丁目二十三番地 金昌堂

## 帝國教育會夏季講習會廣告

師範學校中學校高等女學校の教員及び該教員志望者其他左の學科研究志望者の爲め本年八月一日より同二十七日日本會に於て夏季講習會を開設す志望の方は其講習すべき學科及び氏名住所職務を記したる書面を以て至急本會へ申込ざるべし

### 夏季講習會要項

一講習科及講師は左の如し

- 一教育學 高等師範學校及哲學部師範文學士 熊谷五郎君
- 一國語 東京帝國大學文學部女子高等師範學校師範文學士 岡田正美君
- 一教育行政 東京帝國大學法學部大學師範法學博士 木場貞長君

一心理學 東京帝國大學農科大學講師文學士 塚原政次君  
一動物學 東京帝國大學農科大學教授理學博士 石川千代松君

尙講習の餘料として一回又は數回の講演を承諾せられたる諸氏は左の如し  
文學士 澤柳政太郎君 湯本武比古君  
ドクトル 藏原惟郭君 文學博士 松本亦太郎君

一講習料は左の割合を以て前納すべし  
一一學科を講習するもの 金壹圓五拾錢  
一二學科を講習するもの 金貳圓五拾錢  
一三學科以上を講習するもの 金を圓五拾錢

但本會々員及中等教員講習生は特に講習料五分の一を減す  
東京市神田區一ツ橋通町二十一番地

明治三十四年四月 帝國教育會



明治三十四年四月二十二日發行  
明治三十四年四月二十二日發行  
明治三十四年四月二十二日發行  
明治三十四年四月二十二日發行  
明治三十四年四月二十二日發行  
明治三十四年四月二十二日發行  
明治三十四年四月二十二日發行  
明治三十四年四月二十二日發行  
明治三十四年四月二十二日發行  
明治三十四年四月二十二日發行

國語研究會編

高等普通文綴方教科書

(刊新中月四)

全二册 和裝製美本 定價各金拾八錢 郵稅各金四錢

- 一本書は改正教則に基づき高等小學校國語科綴方の教授用參考書として編纂したるものなるが之れを兒童に持たしめて模範文となさしむるも可なり
- 一本書は各學年に分ちて教材を排列し其教材は今回各府縣に採用せられたる主なる讀本に準據し併せて一般に適合せる日常必須の事項を網羅して記述せり
- 一本書は始めに教授上の心得として第一章に注意すべき要件第二章に教授法第三章に添削法第四章に往復文の容儀即認方第五章に公用文を掲げ叮嚀懇切最も適切に説述せり
- 一本書書簡文は候文體を採用せるは勿論なるがまかも口語體を本體として説述したるを以て其用語は極めて平易にして兒童に解し易きのみならず各文章の欄外には用語の應用を列舉して教授者の便に供せり
- 一本書に用ひたる假名、字音假名遣及漢字はすべて小學校令施行規則に準據せり
- 一本書は分ちて二巻とし一巻は一、二學年用に充て一巻は三、四學年用に充てたりされば之れを兒童に持たしむる場合には其必要に應じ各自一巻づつ購求するを得べし
- 一本書は中正なる議論と確實なる實驗とを以て普通文の形式日用文の用語及其連絡教授上の配合等目下教育社會に噴々たる一切の疑問を悉く明解して説述したるものなれば現今の如き革新時期に際しては蓋し無二の良參考書ならむ

發行書肆

東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地(電話本局九百五十八番)

金 昌 堂